

永久保存（10-10）

住吉宮町遺跡発掘調査報告書

—住吉駅南線一部新設工事及び住吉駅ビル建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成3年1月

兵庫県教育委員会

住吉宮町遺跡発掘調査報告書

—住吉駅南線一部新設工事及び住吉駅ビル建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 3 年 1 月

兵庫県教育委員会

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査と整理の体制	2

第2章 位置と環境

第3章 昭和63年度の調査

第1節 エレベーター部分の調査	9
1 調査区の概要	9
2 層序	10
3 遺構	10
4 遺物	12
第2節 自由通路橋脚基礎部分・推進工到達立坑の調査	13
1 調査区の概要	13
2 層序	13
3 遺構	15
4 遺物	16

第4章 平成元年度の調査

第1節 調査の方法と全体の概要	17
第2節 I区の調査	21
1 調査区の概要	21
2 遺構	22
第3節 II・III区の調査	29
1 調査区の概要	29
2 遺構	30
第4節 IV区の調査	37
第5節 平成元年度調査分の出土遺物	39
1 遺構出土の土器	39
2 古墳時代中期末頃の河道出土の土器	39
3 包含層出土の土器	39

4 包含層出土の鉄製品	44
第5章 まとめ	46
土器観察表	48

挿図目次

第1図 住吉宮町遺跡の位置周辺の遺跡	4
第2図 昭和63年度・平成元年度調査地点位置図	8
第3図 エレベーター部分平面図	9
第4図 エレベーター部分土層断面図	11
第5図 溝1出土土器	12
第6図 P-1~3・推進工到達立坑土層柱状図	14
第7図 推進工到達立坑検出の遺構	15
第8図 推進工到達立坑土層断面図および層相	15
第9図 推進工到達立坑出土の土器	16
第10図 平成元年度調査区全体図・基本層序堆積模式図	18
第11図 第I区全体図（中世遺構面・古墳時代中期末～奈良時代遺構面）・土層断面図	20
第12図 1号墳	23
第13図 1号墳周溝土層断面図	23
第14図 2号墳	24
第15図 溝5	25
第16図 石垣状遺構2・溝7	27
第17図 II・III区全体図・土層断面図	31
第18図 3号墳	33
第19図 4号墳・土壤4部分の土層断面図	34
第20図 土壤3	35
第21図 IV区土層断面図	38
第22図 遺構および古墳時代中期末墳の河道出土土器	40
第23図 包含層出土の弥生時代後期末・古墳時代中期末墳の土器	41
第24図 包含層出土の奈良時代～江戸時代の土器	42
第25図 包含層出土の鉄製品	43

図版目次

- 図版1 住吉宮町遺跡周辺空中写真
- 図版2 住吉宮町遺跡遠景
1. 遺跡遠景（北から）
 2. 遺跡遠景（南から）
- 図版3 昭和63年度調査（エレベーター部分）
1. 主調査区全景（南東から）
 2. 石垣状遺構1・溝1検出状況
- 図版4 昭和63年度調査（エレベーター部分）
1. 主調査区土層堆積状況（西壁）
 2. トレンチ3土層堆積状況（北西から）
- 図版5 昭和63年度調査（P-3）
1. P-3旧地形検出状況
 2. P-3調査状況
- 図版6 昭和63年度調査（推進工到達立坑）
1. 推進工到達立坑土壤検出状況
 2. 推進工到達立坑ピット確認状況
- 図版7 平成元年度調査（I区）
1. I・2号墳検出状況（西から）
 2. 1号墳全景（南から）
- 図版8 平成元年度調査（I区）
1. 2号墳西半部（南西から）
 2. 2号墳東半部（東から）
- 図版9 平成元年度調査（I区）
1. 溝5全景（西から）
 2. 溝5全景（北から）
- 図版10 平成元年度調査（I区）
1. 石垣状遺構2・溝7検出状況（北から）
 2. 石垣状遺構2・溝7検出状況（南東から）
- 図版11 平成元年度調査（I区）
1. 土層堆積状況（西壁）
 2. 1・2号墳周溝部分（北壁断面）

図版12. 平成元年度調査（II区）

1. 3号墳全景（西から）
2. 3号墳・土壤3全景（東から）

図版13. 平成元年度調査（II区）

1. 3号墳全景（東から）
2. 3号墳（P-2部分）

図版14. 平成元年度調査（II区）

1. 4号墳周溝（南壁断面）
2. 古墳時代後期河道土層堆積状況（II・III区间断面）

図版15. 平成元年度調査（III・IV区）

1. IV区全景
2. 土層堆積状況（III区北壁）

図版16 昭和63年度出土遺物・河道出土遺物

1. 溝1(1・2) 推進工到達立坑包含層(3・5)
2. 古墳時代中期末頃の河道(8・9・10)

図版17 遺構・河道出土の遺物

土壤3(7)・古墳時代中期末頃の河道(11~16)

図版18 遺構・包含層出土の遺物I

1. 3号墳周溝(6)・弥生時代後期(17・19)・古墳時代中期末頃(26・28~30・32)
2. 奈良時代~江戸時代

図版19 包含層出土の遺物II

1. 古墳時代中期末頃(21~24・25・27・31)
2. 鎌倉時代(35・37)

図版20 包含層出土の遺物III（鉄製品）

1. 鎌(46)・鉄鎌(47)
2. 不明鉄製品(48)

例　　言

1. 本報告書は、神戸市東灘区住吉宮町・住吉東町に所在する住吉宮町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は西日本旅客鉄道株式会社（昭和63年度）・神戸ステーション開発株式会社（平成元年度）の委託を受けて兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した。整理調査は西日本旅客鉄道株式会社の委託を受けて平成2年度に兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 兵庫県教育委員会ではすでに西日本旅客鉄道株式会社の委託を受けて2度の調査を行い、「住吉宮町遺跡群I」（1989年）・「住吉宮町遺跡群II」（1990年）を刊行している。本報告書は兵庫県教育委員会より刊行する住吉宮町遺跡に係わる報告書としては3冊目にあたる。
4. 現地調査は、池田正男・吉田 昇・西口圭介・久保弘幸が担当し、株式会社三井建設大阪支社の協力を得て、昭和63年・平成元年度に実施した。
5. 整理調査は吉田 昇・西口圭介・久保弘幸が担当し、平成2年度に実施した。
6. 現地調査・整理調査に係る経費は全て西日本旅客鉄道株式会社が負担した。
7. 遺構の実測は濱野俊一の補助を受け、調査員が実施した。遺物の実測・清図は和田早芳子が行い、遺物写真については、株式会社サンスタジオに依頼した。また、金属製品の保存処理については、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて加古千恵子が実施した。
8. 本書に使用した標高値は、西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所の工事用B.M.を利用した海拔高である。方位は特に断りのない場合については真北である。使用した座標は国土地理院第V系である。
9. 本書に掲載した挿図のうち、第1図は国土地理院発行の1/25000（西宮）の地図を使用しており、第2図は神戸市発行の都市計画図1/2500（住吉）を一部使用している。また、図版第1は、国土地理院撮影の航空写真を利用している。
10. 本書中の平成元年度調査の層位の表示については、第4章の基本層序（アラビア数字）を各調査区共通に使用し、表記している。また、遺物図はその断面を須恵器・磁器・陶器については墨入れ、瓦器についてはスクリーントーン貼付を断面に施している。
11. 原稿執筆分担は以下の通りである。
西口圭介 第1章・第2章・第3章第1節・第4章・第5章
久保弘幸 第3章第2節
12. 出土した遺物については全て兵庫県教育委員会で保管・管理している。
13. 本書の編集は西口が行い、その責任がある。
14. 調査及び報告書の作成にあたっては丹治康明氏より多大の御教示を得た。記して深く感謝の意を表するものである。

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

住吉宮町遺跡は、昭和60年度に宅地開発に伴って確認された遺跡である。昭和60年以降今回報告する昭和63年度の兵庫県教育委員会の調査までに、兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会によって8地点・11次の調査が行われている。

このうち、新交通3号線（六甲アイランドとJR住吉駅を結ぶ新交通システム、以下新交通システムと表記する。）に伴う調査は兵庫県教育委員会の手によって昭和61年度から実施されており、本報告書において述べる昭和63年度後半期・平成元年度に実施した調査もまた、新交通システム建設に伴い生じた調査である。

1. 昭和63年度調査の経緯

昭和63年度の調査は、神戸市都市計画道路3・6・8号線建設に伴う自由通路敷設工事に起因するものである。自由通路は新交通システムとJR間や駐車場への連絡通路、その昇降口等の施設を指すもので、その敷設に伴う一部の調査は昭和63年5月に実施されており、「住吉宮町遺跡群I」（兵庫県教育委員会 1989.2）に結果が報告されている。

本報告書において述べる昭和63年度後半期の調査は、昭和63年10月21・22日と、自由通路橋脚部を調査した昭和63年11月21日～12月17日の2度実施した。いずれも、対象範囲が狭く、平面的な調査が不可能であることから、立ち会い調査として観察を行うこととした。

昭和63年10月21・22日の調査は、JR住吉駅ビル南西隅に敷設されるエレベーター部分とエレベーターと駅ビルを結ぶ通路の橋脚部分1箇所について実施した。調査対象地は昭和63年5月に西脇部分が調査されており、遺構が確認されている部分である。以下、「エレベーター部分の調査」と呼称する。

このうち橋脚部分については、山陽本線線路際に近く、掘削深度が深いことから、断面観察を行い、当日中に埋めもどした。

エレベーター部分については、21日に2本のトレンチを開けたところ、遺構が確認されたため、翌22日に全面調査をおこなった。調査面積は、エレベーター部分約27m²・橋脚部分約7m²である。昭和63年11月21日～12月17日の調査は、3ヶ所の自由通路の橋脚基礎部分と水道管敷設のために開けられた推進工到達立坑部分1ヶ所の調査である。以下、「自由通路の橋脚基礎部分・推進工到達立坑の調査」と呼称する。

自由通路の橋脚基礎は、昭和62年度に調査された新交通システムの橋脚基礎（P-6・7）の南側に位置し、推進工到達立坑は、JR住吉駅下り線プラットホーム上にある。工事は、橋脚基

礎・推進工到達立坑とともに鋼鉄製枠（ライナー：各個の高さ50cm）を、掘削に伴い1段づつ敷設するもので、埋蔵文化財の調査もまた、ライナー敷設の合間を縫って50cmの掘削ごとに断面・平面の精査を繰り返すこととなった。ライナー敷設を伴った橋脚基礎部分の調査は、昭和62年度にも実施されているが、委託事業による発掘調査として実施されており、昭和63年度の調査は、本体工事の工法に縛られた極めて特異な立ち会い調査であった。

調査面積は、橋脚基礎部分約27m²・推進工到達立坑部分約4m²である。

2. 平成元年度の調査

平成元年度の調査は都市計画道路住吉南線基礎工事に伴う調査である。調査対象地約385m²は、昭和62年度に調査された新交通システムの橋脚基礎（P-6・7・8・9）の南側にあたる。また、調査対象地の南側は昭和63年に神戸市教育委員会が発掘調査を実施している。昭和63年度に調査を行った3箇所の自由通路の橋脚基礎は、調査区の西半分に取り込まれており、奇しくも、確認調査の役割を果している。

これらの過去の調査結果から、調査に支障のない深度（標高23.20m前後）までは西日本旅客鉄道株式会社が機械掘削を行い、以下を埋蔵文化財の発掘調査対象として扱うこととした。

第2節 調査と整理の体制

1. 調査の体制

発掘調査は、西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査体制は次のとおりである。

昭和63年度エレベーター部分の調査

事務担当	調査担当
社会教育・文化財課長 中根 孝司	社会教育・文化財課
文化財担当参事 森崎 理一	主 査 池田 正男
課長補佐 兼	技術職員 西口 圭介
埋蔵文化財調査係長 大村 敬通	

昭和63年度自由通路橋脚基礎・推進工到達立坑の調査

事務担当	調査担当
前記に同じ	社会教育・文化財課
	技術職員 西口 圭介
	技術職員 久保 弘幸

平成元年度調査（平成元年8月28日～10月20日）

埋蔵文化財調査事務所

事務担当

所長 大江 剛

副所長 才木 繁

副所長兼

調査第2課長 村上 紘揚

主査 池田 正男

調査担当

調査第2課

主査

吉田 昇

技術職員

西口 圭介

調査補助員

濱野 俊一

2. 整理の体制

調査の結果出土した遺物については、発掘調査と並行して現場事務所で一部の水洗い・ネーミングを実施し、水洗い・ネーミング・接合・復元・実測トロース・レイアウトの諸作業の大半は平成2年度に、埋蔵文化財調査事務所にて実施した。

整理の体制は次のとおりである。

平成2年度

埋蔵文化財調査事務所

事務担当

所長 内田 隆義

副所長 村上 紘揚

総務課長 小池 英隆

整理事務担当

整理普及課長 松下 勝

技術職員 岸本 一宏

金属器担当 加古千恵子

整理担当

技術職員 西口 圭介

同 久保 弘幸

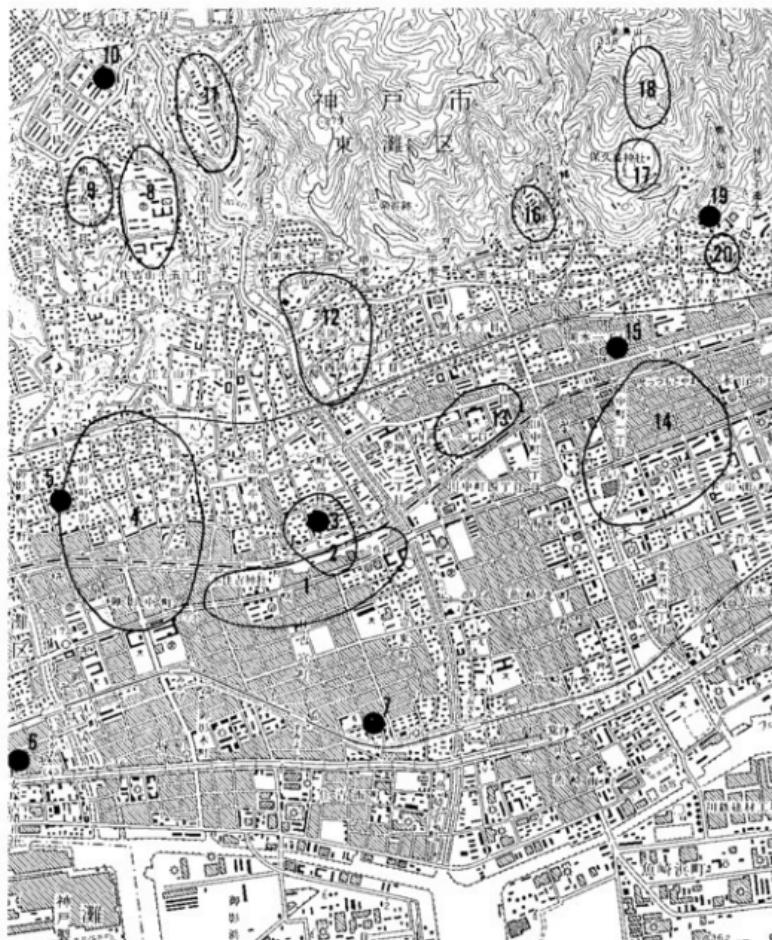
嘱託職員 和田早芳子

同 斎藤海子

同 本庭田英子

同 木下 佳子

同 井谷 由美



- | | | | |
|----------|-----------|------------------|------------|
| 1 住吉宮町遺跡 | 6 处女塚古墳 | 11 荒神山遺跡 | 16 同本柳林古墳 |
| 2 坊ヶ塚遺跡 | 7 東求女塚古墳 | 12 西岡本遺跡(野寄り古墳群) | 17 保久良神社 |
| 3 坊ヶ塚古墳 | 8 赤塚山遺跡 | 13 同本遺跡 | 18 金鳥山遺跡 |
| 4 郡家遺跡 | 9 鶴子ヶ原古墳群 | 14 本山遺跡 | 19 生駒銅鐸出土地 |
| 5 伊賀塚古墳 | 10 溝ヶ森遺跡 | 15 羽保曾塚古墳 | 20 坑ノ内遺跡 |

第1図 住吉宮町遺跡の位置 周辺の遺跡

第2章 位置と環境

住吉宮町遺跡は、神戸市東灘区住吉宮町3・4・6・7丁目・住吉東町5丁目に広がり、神戸市遺跡地図に東灘区No39として登録されている周知の遺跡である。住吉川右岸の標高20m前後、住吉川・石屋川が形成した土石流起源の扇状地とその縁辺部に立地している。

住吉宮町遺跡は現状では現在の国道2号線・JR東海道線沿いに東西に長く展開しており、大体南北約300m、東西約1kmの長楕円形に囲まれた部分が遺跡の範囲と推定されている(1)。

(2)の坊ヶ塚遺跡は住吉宮町遺跡(1)と重複し北側に位置しているが、時期的にも同じであり、基本的には、住吉宮町遺跡と同じ遺跡と理解してもよいであろう。

遺跡の立地とその形成過程や地理的な環境についてはこれまでに刊行されてきた『北青木遺跡』¹³『小路大町遺跡発掘調査報告書』¹⁴『住吉宮町遺跡群I(坊ヶ塚遺跡)』¹⁵『同II』¹⁶の報告書に詳しく、本報告では割愛するが、扇状地は、土石流による幾つもの入り組んだ舌状の微高地と微高地間の谷地形部分より構成されており、6世紀末頃の洪水砂によって一部の谷部が埋没していることが指摘されている。住吉宮町遺跡は弥生時代から近世・近現代に至る幅広い遺構・遺物を検出しているが、それらは扇状地の形成過程一微高地の形成、谷部の埋没といった微地形の変化の中で幾分各時期の遺構の分布範囲を変えているのである。

この住吉宮町遺跡群を中心に石屋川左岸から天上川左岸周辺までの東側へ約2km・西側へ約1.5km・南側へ海岸線まで約1km・北側へ約2.5kmの範囲の遺跡を地図上にあげた(第1図)。大体ではあるが、住吉川が供給する土砂による扇状地の主な部分を画角に取り込んでいくよう。遺跡の分布は住吉川の左右岸をそれぞれ、六甲山より派生する尾根上一右岸(8・10・11)・左岸(17・18)、山麓から丘陵、大まかには阪急電鉄神戸線より北一右岸(9)・左岸(12・19・20)、扇状地上、大まかにはJR東海道本線から国道2号線周辺右岸(1~5)・左岸(13~15)、海岸部付近の低地一阪神電鉄付近(6・7)に分けることが出来る。

あげることの出来た遺跡はさほど多くはない。尾根から山麓にかけては古くからの宅地開発によって既に往年の松林の景観はなく、多くの尾根上の高地性集落遺跡、山麓の群集墳等は消滅している。地図に落とした尾根上・山麓の遺跡の多くが紙上の遺跡となっているのである。

扇状地部分もまた、早くから市街地化しており、厚い洪水堆積物の存在とあいまって遺跡の存在は殆ど判らないもので、発見例も極僅かであった。しかし、近年、都市再開発の波に乗って遺跡の調査例が急増してきており、従来の認識は払拭されつつある。大型建造物の基礎工事が厚い洪水堆積層を貫くことで漸く深深度の遺跡の存在が明らかとなってきた。住吉宮町遺跡もまたそのようにして厚い洪水堆積層の下から明らかとなった遺跡なのである。

海岸部は工業地帯として開発されつくしており、逆に近年まで標高10m以下の低地には遺跡

は存在しないという誤った認識のもと殆ど注意を払われずにきていた。地図上では(6)(7)といつた目に見える古墳が記されている以外に遺跡がないのはこのためである。しかし、海岸部でも近年、都市再開発の波に乗って遺跡の調査例が急増してきており、北青木遺跡・深江遺跡・深江北町遺跡¹⁵などの調査によって砂堆上の遺跡の存在が明らかになってきている。

周辺の遺跡の紹介は幾つもの報告書や神戸市史¹⁶の刊行があり、概略のみを述べておく。

住吉宮町遺跡近辺には、旧石器時代の遺跡はいまの所確認されていない。周辺の遺跡では芦屋市朝日ヶ丘遺跡・神戸市灘区桜ヶ丘B地点遺跡があげられる。縄文時代の遺跡としては、縄文時代早期の住居址が検出されている西岡本遺跡(12)、扇状地にあって若干の晩期の土器が出土している本山遺跡(14)¹⁷があげられる。それ以外には住吉宮町遺跡の近辺では縄文時代の遺跡は見られない。周辺では、前期では旧石器時代から継続する朝日ヶ丘遺跡や同じく芦屋市山芦屋遺跡がある。中~後期では、山麓・丘陵部に位置する山芦屋遺跡や神戸市灘区の篠原遺跡¹⁸に加え、東灘区本庄町遺跡¹⁹や井戸田遺跡といった扇状地に立地する遺跡や海岸部の砂堆上に立地する北青木遺跡で遺物の出土をみている。

弥生時代の遺跡は、前期では本山遺跡(14)があげられる。旧河道内より遺物の出土をみている。周辺では北青木遺跡で水田遺構が検出されており、近接する深江遺跡では遺物の出土をみている。本山遺跡は標高8m、扇状地の末端に位置しており、北青木遺跡・深江遺跡は本山遺跡の南にあって標高2m~3m前後の海岸砂堆上に立地している。いずれも標高10mを割る低地に立地している。住吉川右岸では周辺で前期の遺跡は群らかではないが、処女塚古墳(6)の周溝内より前期の土器が出ており、住吉川左岸同様、砂堆上に遺跡が立地している可能性がある。中期には低地の前期からの遺跡は殆どなくなり、尾根上の高地性集落遺跡(8~11・17・18)と共に標高20m前後の扇状地で遺跡が増加する。住吉川右岸では住吉宮町遺跡が活動を開始する。また、左岸では本山遺跡(14)やその北東にある森北遺跡が中期に活動している。²⁰

後期においても中期同様の遺跡の有り方を示し、扇状地上・尾根上に遺跡が存在する。住吉宮町遺跡では方形周溝墓が築かれ、郡家遺跡で竪穴住居址・円形周溝墓がつくられている。

古墳時代の遺跡は、前期の古墳では、海岸部の砂堆上に前方後方墳の処女塚古墳(6)・前方後円墳の東求女塚古墳(7)、扇状地上では扁保曾塚古墳(15)がある。遺跡では、坊ヶ塚遺跡より竪穴住居址・土壙墓・土器棺、郡家遺跡においても竪穴住居址等若干の遺構を検出しているが、明確な遺構を伴う遺跡は少ない。

中期の古墳は近辺には見当たらず、芦屋市の金津山古墳・打出小槌古墳が海岸部に立地している。坊ヶ塚古墳(3)は前期もしくは中期の前方後円墳であるが時期が特定出来ない。

後期、特に後期前半は住吉宮町遺跡を構成する主な時期である。住吉宮町遺跡の西側にある郡家遺跡では5世紀後半から6世紀後半にかけて継続的に村落が営まれており、住吉宮町遺跡群の古墳を造営した集団の住居であった可能性がある。

後期後半の古墳は芦屋市の八十塚古墳群・城山南麓古墳群・三条古墳群^{註11}、東灘区の岡本梅林古墳群(16)・灘区の十善寺古墳群と六甲山南側の山麓に群集墳が多数存在していたが、早い時期の開発によってその殆どが消滅している。住吉宮町遺跡近辺では坊ヶ塚遺跡で2基検出されているほか、鴨子ヶ原に4基以上の古墳が存在していた(9)。この鴨子ヶ原古墳群は郡家遺跡の北方にあり、郡家遺跡の集團の住吉宮町遺跡以後の後期後半の墓域であった可能性がある^{註12}。また、西岡本遺跡(12)で平成元年度に7基の横穴式石室墳が検出されている。

伊賀塚古墳(5)は郡家遺跡の西端にあった巨石を用いた横穴式石室墳であったと考えられるが、現存はしていない。郡家遺跡からは耳輪の出土もあり、周辺に幾つかの古墳—比較的規模の大きな独立墳が存在していた可能性がある。

奈良時代から平安時代にかけての遺跡は、郡家遺跡が菟原郡衙の可能性を指摘されており、大蔵地区から奈良・平安時代の建物址が検出されている。住吉宮町遺跡においても奈良時代の建物址・鎮壇具が検出されており^{註13}、平成元年年度の調査においても綠釉陶器を含む若干の遺物を検出している。また、坊ヶ塚遺跡の南側を東西に旧山陽道が通っていたと考えられるが、それに関連する遺構は検出されていない。周辺地では、芦屋市寺田遺跡で和同開珎が^{註14}、東灘区深江北町遺跡では銅製丸鞘・円面鏡が出土しており、建物址をともなう2者はとともに官衙に係わる可能性が指摘されている。また、高地性集落遺跡でもある保久良神社遺跡は奈良時代の古瓦や鎌倉時代の懸仏を出土しており特異な祭祀遺跡として注目される。

鎌倉時代の遺跡は、住吉宮町遺跡・郡家遺跡で遺構が検出されている他、本山遺跡においても井戸が検出されている。周辺地では森北町遺跡・本庄町遺跡で遺構・遺物を検出している。

註1 高橋 学『付論 芦屋川・住吉川流域の地形環境 I』『北青木遺跡』兵庫県教育委員会 1986年

註2 高橋 学『付論 芦屋川・住吉川流域の地形環境 II』『小路大街遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1987年

註3 渡辺 昇『住吉宮町遺跡群 I (坊ヶ塚遺跡)』兵庫県教育委員会 1989年

註4 高橋 学『付論 芦屋川・住吉川流域の地形環境 IV』『住吉宮町遺跡群 II』兵庫県教育委員会 1990年

註5 山下史朗『深江北町遺跡』兵庫県教育委員会 1988年

註6 『新修神戸市史 歴史編 I 自然考古』神戸市 1990年

註7 南 博史『本山遺跡発掘調査報告書』古代學協會 1984年

註8 下條信行『蘿原A遺跡』古代學協會 1984年

註9 片岡 雄『本庄町遺跡発掘調査報告書』古代學協會 1985年

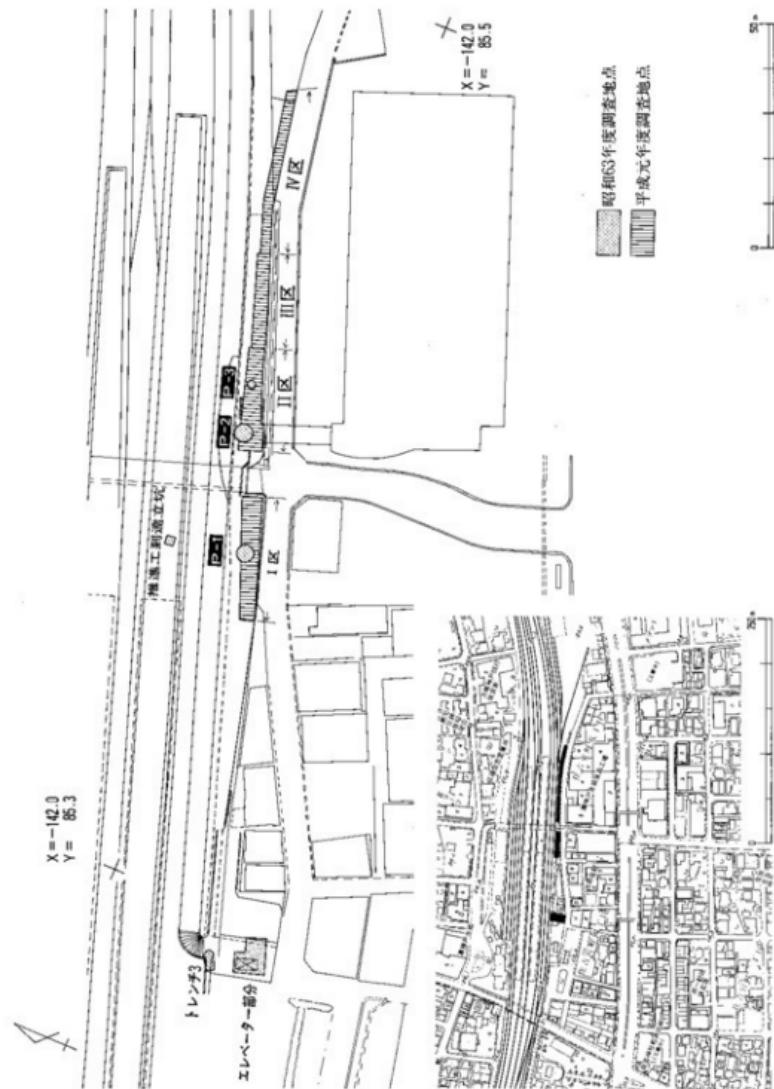
註10 『森北町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1987年

註11 『新修芦屋市史 資料編』芦屋市 1976年

註12 『新修神戸市史 歴史編 I 自然考古』神戸市 1990年

註13 住吉宮町遺跡第11次調査(神戸市教育委員会) 1989年調査

註14 南 等史『寺田遺跡発掘調査報告書』古代學協會 1985年



第2図 昭和63年度・平成元年度調査地点位置図

第3章 昭和63年度の調査

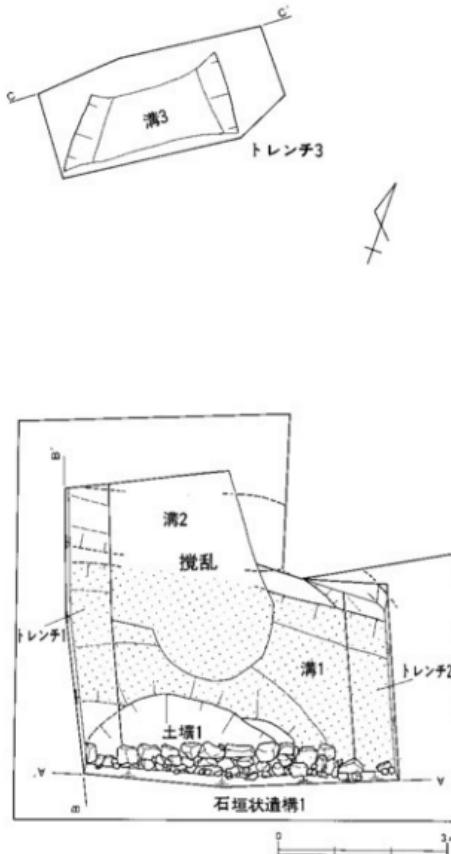
第1節 エレベーター部分の調査

1. 調査区の概要

エレベーター部分と呼称した調査区は、JR住吉駅ビル南西隅に位置しており、昭和63年5月に調査をおこなった自由通路部分の東地区^四を南北に挟み込む位置にある。

主調査区であるエレベーターの昇降機本体が設置される部分は自由通路部分の東地区的南に隣接している。南北長7.2m、東西幅5mの長方形に、東へ長3m、幅5mの張出がついたL字の形状の工区が調査対象区であった。但し、工事に伴い、すでに四周にH鋼が打ち込まれ、更にH鋼による田の字形の梁が工区内に架構されているため、調査可能な範囲は、更に少なく、南北長5m、東西幅3mの長方形に、東へ長2m、幅3.5mの張出がついたL字の形状が調査可能な範囲であった。全面調査に先立ち、機械掘削による断面観察を主としたトレンチを東西両側に各1本（トレンチ1・2）設定した。

調査の結果、主調査区の北1/3は、近現代の搅乱およびコンクリート製の井戸の敷設によって遺構面が消失していることが判明した。残る部分より、古墳の周溝と考えられる溝1



第3図 エレベーター部分平面図

本、性格不明の溝1本、土壤状の落ち込み1基、近世以降の石垣状遺構1か所を検出した。

橋脚基礎部分は、自由通路部分の東地区の北隣に位置し、昭和63年度に調査をおこなった橋脚基礎(1P-S)ⁱⁱⁱの東側に位置する。橋脚基礎部分の調査区は、JR山陽本線の線路に近接しており、掘削に制約を受けたため、機械掘削による断面観察を主としたトレンチ(トレンチ3)とした。東西長4.2m、南北幅1.6mの長方形を呈している。

調査の結果、溝状遺構1本を検出した。

2. 層序(第4図)

主調査区・トレンチ3とともに基本的な土層堆積には違いがない。近現代の塵芥を含む搅乱土下には、近現代～近世にかけての耕作土とその床土、洪水堆積と考えられる砂層と層順が古くなる。近世以降の土壤化の激しい極細砂層は、洪水砂層の下に存在し、石垣状遺構の被覆土となっている。石垣状遺構は濁灰色砂層(8層)上に造られるが、8層は主調査区・トレンチ3全域に広がる層ではない。溝1・土壤1は、上面が土壤化した砂層(22層)より切り込む。溝2の肩部の埋土を構成する17層はトレンチ3では溝3が切り込む面を構成する層位として認識される。遺構の標高は全調査区22層上面で22.80m、トレンチ3 17層上面で22.90mである。22層より下層には1.5m以上も厚く砂層が堆積しており、遺構遺物は見出されなかった。

3. 遺構

石垣状遺構1(第3図)

主調査区南壁際において検出した。径20cm～50cm程度の角のとれた石を1段もしくは2段に積んでいる。東西方向へ並ぶ石は3列以上存在するが、最外側(北側)の列には径50cm程度の比較的大きな石を据えており、面を描えている。

石垣の外側に溝等の遺構は検出されず、性格は不明であるが、被覆土の土壤化が激しいことから、水田・畠地等に周辺が使用されていた可能性が高く、石垣状遺構は農業耕作に伴う施設であった可能性が高い。

遺物の出土は石垣の間より染付け椀片が出土している。

土壤1(第3図)

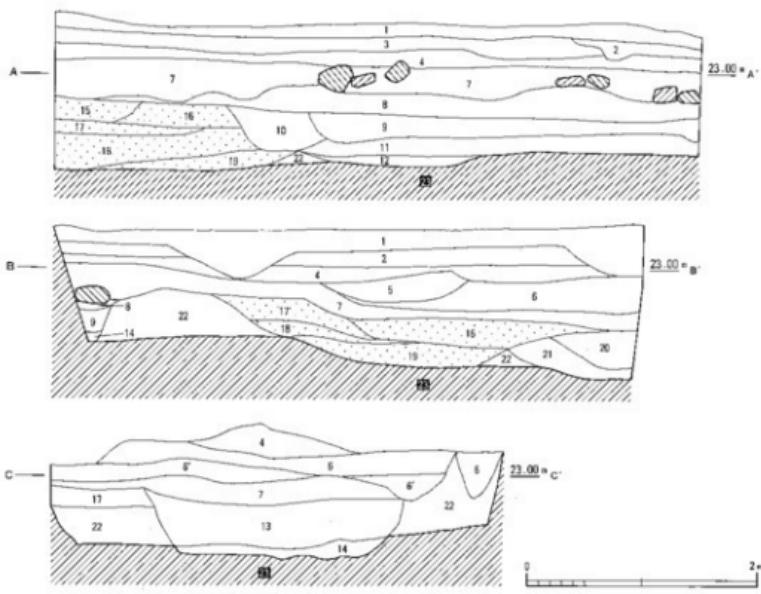
主調査区において検出した。石垣状遺構の下層に位置し、溝1と切り合い、後出す。

土壤の大半は調査区外となるため平面形状・規模は詳らかではない。断面形状は土壤底が平坦な箱形に近い皿状を呈し、深さは約40cmを測る。土壤下半には、黄色砂が堆積しており、ある程度の時間開いていたものと考えられる。

遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。

溝1(第3図)

主調査区において検出した。溝2と切り合い、後出す。東西方向に走行をもち、東端において南側へ屈曲を見せている。溝幅約2.5m、深さ約65cm、溝底の形状が平坦な浅いU字状の断



1 濁焦茶色細砂—近現代の擾乱土	13 淡褐色シルト	(溝3埋土)
2 暗灰色細砂—近現代の耕作土	14 黄褐色細砂～中砂	(溝3埋土)
3 褐白～褐灰色細砂混じり極細砂	15 暗褐色極細砂	(溝1埋土)
4 黄色シルト混じり極細砂～細砂	16 褐色～黒褐色シルト混じり極細砂(溝1埋土)	
5 茶白色細砂	17 黑褐色シルト混じり極細砂	(溝1埋土)
6 灰色細砂	18 暗黄灰色細砂	(溝1埋土)
6' 灰色細砂—6との間に砂礫を挟む。	19 茶灰色シルト混じり極細砂	(溝1埋土)
7 褐灰色細砂	20 褐色～暗灰色シルト混じり極細砂(溝2埋土)	
8 濁灰色細砂～中砂	21 暗灰色細砂	(溝2埋土)
9 晴灰色細砂～中砂	22 暗灰色シルト～細砂	
10 褐灰色極細砂	23 黄色中砂	
11 濁黄白色シルト混じり細砂		
12 灰色シルト混じり極細砂		
		(土壤1埋土)

第4図 エレベーター部分土層断面図

面形状を持つ溝である。溝底にやや土壤化した砂層、中層に洪水砂と考えられる砂層、上層にシルト質の土壤化の激しい極細砂層が堆積しており、恒常的に水が流れた形跡はない。

南側への屈曲は、ほぼ直角に曲がると考えられ、形状からみて、N86.5°Wに東西方向の一辺の方針をもった方形墳の北東隅部分周溝と墳裾であると考えられるが、調査区の狭隘さと上面からの他の遺構の切り込みによって、検出できる範囲に限りがあるため確定は出来ない。

遺物は、土師器小壺・鉢(1・2)が溝南肩部より出土している。

溝 2 (第3図)

主調査区において検出した。溝1と切り合い、先行する。トレンチの掘削・擾乱により、全体の形状は詳らかではなく、切れ切れに検出ができた。溝は北西から南東に向かって弧を描いて緩やかに流れるものと考えられる。

溝幅約0.8m、深さ約0.5m、浅いU字状の断面形状を持つ溝である。

溝内の堆積は、下層に細砂、上層には土壤化した極細砂が堆積している。恒常的に水が流れた形跡はない。遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。

溝 3 (第3図)

トレンチ3において検出した。溝肩は、黒褐色シルト(17層)を切っており、17層を溝内埋土とする溝1に後出すると考えられる。北断面では、溝幅約2.3m、深さ約0.5m、溝底の形状が平坦な浅いU字状の断面形状をもつ。トレンチ3南断面では溝は溝幅約3.2m、深さ約0.5m、と南西側開いた状態となっている。

遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。周溝コーナー部分の可能性があるが、明確にはできなかった。

4. 遺 物 (第5図)

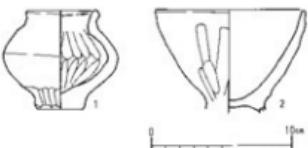
図示できた遺物は、溝1出土の2点のみであった。土師器小壺(1)は算盤玉状の体部に短く外反する口縁部・突出する底部を持つ。土師器鉢(2)は類例に『四つ池遺跡』古墳時代河道内出土遺物^④がある。

主調査区・トレンチ3とともに検出された遺構の出現する標高は約22.8mである。昭和62年度の調査結果では調査区西北側のP-1Sでは約21.5m・P-1Nでは約22.0m、北東側のP-2Nでは約22.5m、調査区東側のP-2Sでは約21.5m、P-3S・P-3Nでは約23.0mで出現している。古墳時代中期末頃と考えられる時期の地表面はエレベーター部分とP-3Sにあたる部分であるP-2S部分で深くなっている、南東に開く小枝谷が入り込んでいたと考えられる。溝3は不整形な形状の溝であるところからみて、この谷部に流れ込む自然流路の可能性がある。

註1 渡辺 畿『住吉宮町遺跡群 I』兵庫県教育委員会 1989年

註2 註1と同じ。

註3 橋口吉文『四つ池遺跡-第83地区発掘調査報告書』堺市教育委員会 1984年



第5図 溝1出土土器

第2節 自由通路橋脚基礎部分・推進工到達立坑の調査

1. 調査の概要

橋脚基礎・推進工到達立坑の調査は、1987年（昭和62年）11月21日～同年12月17日に工事中立会のかたちで実施した。調査は、工事の進捗に伴って、橋脚基礎（P1～P3）および推進工の4地点について、P1・P2・P3・推進工の順におこなった。

本工事は、構造物の基礎部分を構築することを目的としたものであり、P1～P3については、掘削を行いつつ、直径2または4m、高さ50cmの鋼鉄製ライナーを垂直に地下へ敷設してゆくという工法であった。推進工到達立坑についても、一辺がおよそ2mの方形であるほかは、同様である。

このため調査は、50cm掘削が進められるごとに壁面を精査して層序を記録し、必要に応じて、遺構面検出のための平面精査を実施するという方法をとらざるを得なかった。

調査地点付近には、近代以降のものと思われる、六甲山地より流出した花崗岩起源の砂層が厚く堆積していた。調査開始時点には、すでに工事による掘削が、この砂層および一部で旧表土以下に及んでいたため、調査はこれ以下についてのみ実施した。

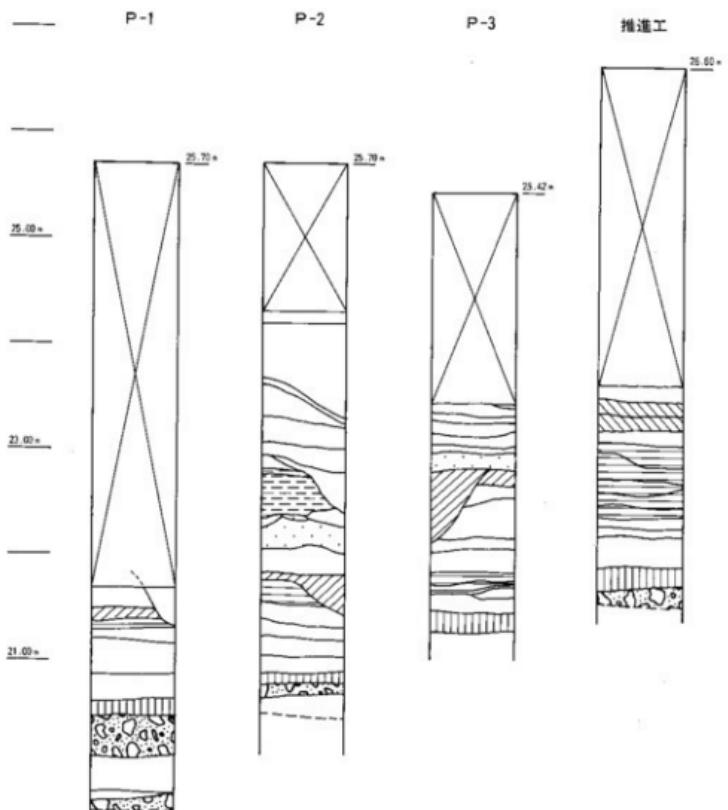
調査の結果、いずれの地点からも遺構・遺物が検出された。以下にその記載をおこなう。ただし、P1～P3については後章の全面調査範囲に包括されるため、ここでは概要を述べにとどめ、遺構・遺物の詳細は後章に委ねる。

2. 層序

各地点での基本層序は、第6図に示したとおりである。全般に六甲山地からの砂を主体とした堆積が卓越しており、この間の土壤化した面あるいはシルト層に、弥生時代末～中世の遺構面、水田面（土壤）、ないしは遺物包含層が検出された。最も山寄りに位置する推進工到達立坑では、安定した堆積状況が遺存しており（第8図）2面で遺構が検出された。第5～9層は、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層となっており、これ以下は次第に粒径の大きな堆積物となる。第14層は、コブリ級の礫を含むが、その上位には土壤化した砂層（無遺物）が見られた。この土壤化層および砂礫層は、P1～P3でも確認された。

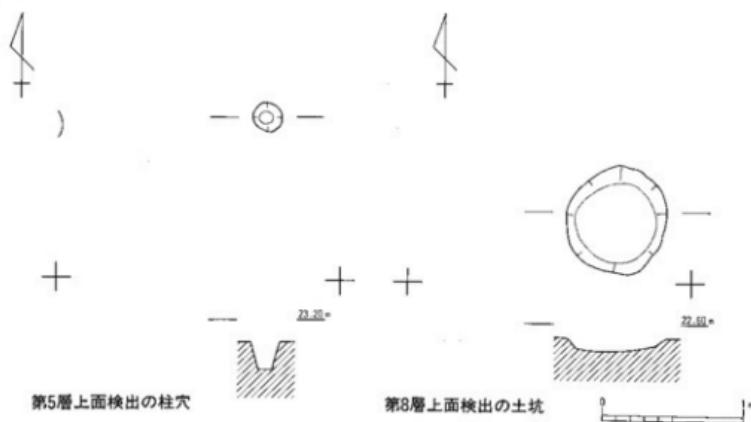
P1～P3は、現況ではほぼ同一等高線上に並んでいるが、最下部の砂礫層および土壤化層は、P1～P3の方向で下がっており、推進工からP3にかけての部分を中心とした、埋没高地の存在が予想される。

各調査地点の層序・層相、および出土遺物、時期等は、第6・9図に示したとおりである。なお、P1～P3の詳細な層序は、後章に改めて記載する。

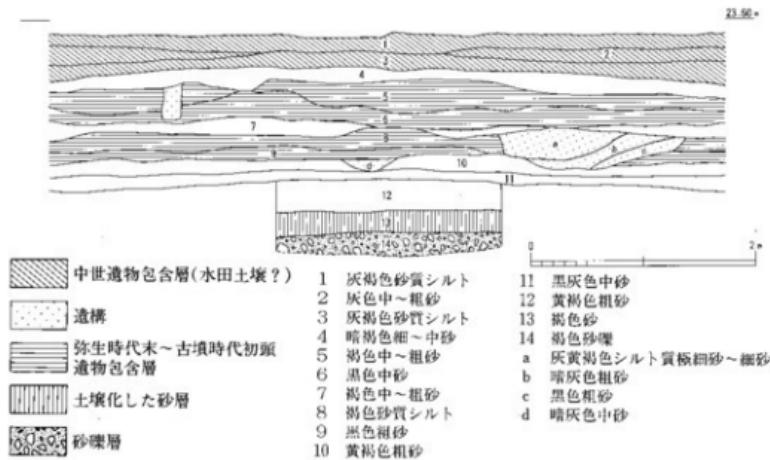


工事済部分	中世遺物包含層 (水田土壤?)	古墳・開溝(5C末)	土壌化した砂層
近世(?)水田土壤	泰良時代遺物包含層 (水田土壤)	幼生時代末~古墳時代初期遺物包含層	砂礫層

第6図 調査地点土層模式柱状図



第7図 推進工到達立坑検出の造構

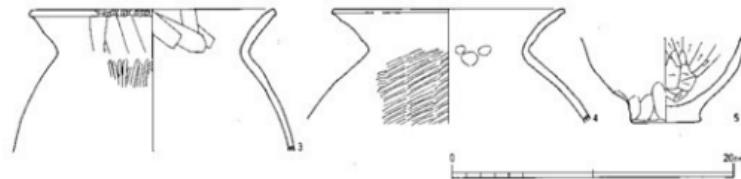


第8図 推進工到達立坑断面図および層相

3. 造構

P 1～P 3 の造構については後に委ね、推進工到達立坑についてのみ記載する。

推進工では、全段で述べたように 2 面で造構が検出された。上位の第 5 層上面では柱穴 2 基、



第9図 推進工到達立坑出土の遺物

下位の第8層上面では、土壤1基がそれぞれ検出されている。

柱穴は、直径20cm、深さ30cm前後のほぼ同規模のもの2基が、約1.6mの間隔で東西に並んで検出された。

土壤は、直径70cm、深さ約15cmで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、淡い灰褐色を呈する極細砂～細砂であった。

いずれの遺構からも遺物は検出されず、個々の性格は明らかにしがたい。しかしその前後の層準より出土した遺物から、上位の柱穴は中世、下位の土壤は弥生時代後期に属するものと考えて大過ないであろう。

4. 遺 物 (第9図)

推進工到達立坑では、前記の各層準から数点～十数点の遺物が出土した。細片が多く、図示しうるものは、第6・7層出土の3点のみである。

3・4は、土師器の壺である。

3は、比較的膨らみの弱い体部をもつ。口縁部はわずかに外反気味に立ち上がり、端部は面をもつように仕上げられている。口縁端部には、キザミが施されている。

内面および口縁部は、ナデが施される。体部外面は、粗いタタキの後、綫方向に粗いハケ目調整が施される。風化のため、内・外面とも調整痕は鮮明ではない。

4は、3に比べて体部の膨らみが大きく、口縁部の屈曲も強い。口縁部はやはり外反気味に立ち上がり、端部は面をもつように仕上げられている。体部外面は、斜めの粗いタタキが施される。内面はナデが施されている。

5は、小型の壺の底部である。底部外面には、指ナデが見られる。内面は、板状工具によるナデが施されている。

3～5の土器は、弥生時代末～古墳時代初頭に位置づけられるものであろう。

推進工到達立坑は、限定された条件での調査であったにもかかわらず、2面の遺構面を検出するという成果を得た。周辺の埋没微高地には、安定した遺構面が広がっている可能性も高く、今後の開発行為に際しては、慎重な調査を要するであろう。

第4章 平成元年度の調査

第1節 調査の方法と全体の概要

調査区は東西に長く、調査区は、当初I～IV区に分けて調査を行った。I区は、道路を挟んだ西側の幅約4m・長さ約27mの調査区、II区は道路を挟んだ東側の幅約3.5～約4.5m・長さ約22mの調査区、III区はII区に続く幅約3m・長さ約21mの調査区である。II区・III区については、便宜的な地区分けであるため、調査過程において同時に調査を行った。このため、次節以降の記述についても、原則的にはII・III区として記述を行うこととする。IV区はIII区に続く調査区であるが、幅約2mと狭く、安全面から全て機械力によって掘削を行い、断面観察を主とした調査区である。調査区の長さは約37mを計る。

調査の結果、平面において検出・精査できたものとして、弥生時代後期の遺物包含層(I・II区)・古墳時代中期の遺物包含層(II区)・古墳時代中期～後期の古墳3基および周溝1か所(I・II区)・古墳時代後期の土壙1基(II区)・古墳時代中期の河道(II～IV区)・奈良時代の貼り石遺構および溝(I区)・鎌倉時代の石垣および溝(I区)・近世の集石遺構(II区)・近世の土石流痕跡(III区)がある。

本遺跡の層序は、基本的には、弥生時代後期地表・古墳時代中・後期の古墳構築面・中世の遺構面・近世の耕作土・現代の盛土と搅乱の順である。これらの面が形成される間には数度にわたる洪水砂の供給が行われており、各調査区での旧地形・遺構の遺存状況には違いがでている。I～IV区の基本的な平面・断面の模式図を第10図に示した。土層の堆積は基本的には20層に集約できる。

I層は標高24.50～25.20mにかけて出現する。調査区全域に施された厚い盛土である。その大半は現在の新交通システム建設に伴うもので、調査前の地表を形成している。標高24.50～24.00mにかけて調査区全域で出現するII層は、旧地表及び塵芥を含む近現代～戦前期を中心とした堆積である。

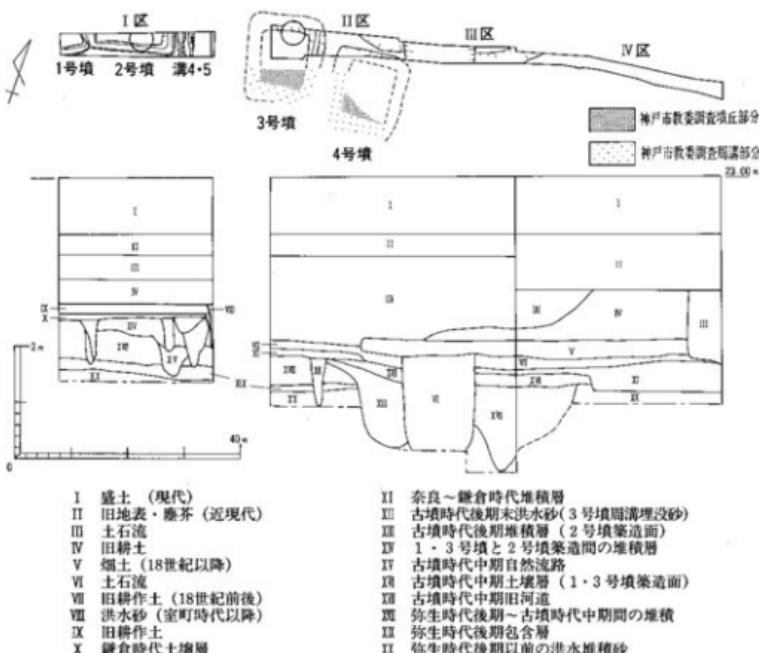
III層は土石流の堆積である。標高24.00mを中心にI～IV区にかけて出現する。

IV層は近代の水田土壤である。標高23.50mを中心にI・III・IV区では出現するが、II区ではIII層によって削られ残存しない。

I～IV層については機械力による掘削を行い、V層以下について人力掘削と精査を試みた。

V層は、標高22.50mにある18世紀以降の畠である。近世陶磁器(45)が出土している。III・IV層に削られ、II区東半～IV区にかけて残存している。

VI層はIII区を分断している土石流である。



第10図 平成元年度調査区全体図・基本層序堆積模式図

VII層は近世の水田土壌である。近世陶磁器が出土している。I区では対応できる層はない。

VIII層はI区の東端を北から南へ流れる洪水砂である。II区以東では対応できる層は確認できない。鎌倉時代の遺物を含み、極めて局地的に存在する。

IX層は水田土壌である。I区のみで存在している。標高23.0mを中心に出現する。II区・III区では同標高では近世以降の水田（V・VII層）が出現しており、IX層は削平されていると考えられる。

X層は溝6・7が掘り込まれる鎌倉時代の遺構面である。標高22.8mを中心にI区のみで出現する。II区・III区では同標高では近世以降の水田（V・VII層）が出現しており、X層は削平されていると認識される。

XI層はII～IV区の標高22.0mを中心に出現する奈良～鎌倉時代にいたる水田土壌層である。I区では対応できる層は出現せず、古墳時代後期遺構面と同一面（III層上面）より奈良時代の遺構が検出されている（溝4・5）。XI層の堆積状態からみて、IからIV区へ向かって奈良時代に

は緩やかな傾斜が存在していたと考えられる。

III層は6世紀末の洪水砂である。古墳を被覆する洪水砂として周辺地で広範囲に確認されているが、本調査区では、II区の3・4号墳・土壤3を埋没させる層として遺構内でのみ検出されている。

III層はI区2号墳の築造面である。III層は1・3号墳の築造面であるIV層が造り出す緩やかな傾斜がIII層によって平坦化し、上面が土壤化することによって形成されている。

IV層は1・3号墳と2号墳の築造される間に堆積した層位である。

IV層は古墳時代中期前後と考えられる自然流路である。

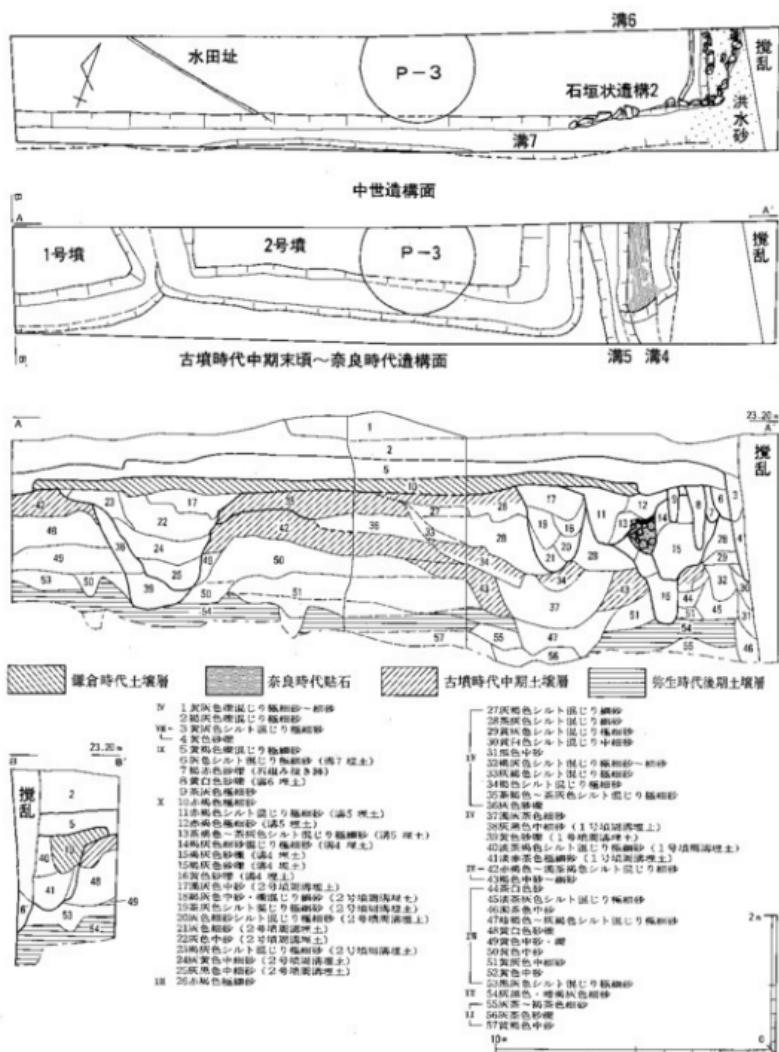
IV層はI～IV区にわたって存在する古墳時代中期末頃の遺構面—1・3号墳の築造面である。西から東へ緩やかに傾斜しており、I区西端とIV区東端では約1mの比高差がある。

IV層はII区よりIV区へ東流する古墳時代後期の河道である。上面にIV層が堆積しており、1・3号墳が築造される時期にはすでに埋没している河道である。

IV層は弥生時代後期末から古墳時代中期の間に供給された洪水砂層である。大まかには3度供給されている。

III層は弥生時代後期の旧地表である。I区よりII区に向かって極く緩やかに傾斜しており、I区西端とII区中央では約0.6mの比高差がある。II区中央より東では古墳時代中期末頃の河道(IV層)と奈良～鎌倉時代にいたる水田土壤層(VI層)によって削られ、旧地表は遺存していない。

例言においても述べたが、以下各調査区の土層堆積については原則としてこのI～IIの層分けを使用する。但し各地区内での層位はさらに細分できる部分も少なくはなく、特にI区はII～IV区と距離を持つ調査区であることもあって細分した土層まで土層名を統一することは不可能であった。このため、集約したローマ数字の土層名に統け、各地区土層断面による細分した土層名一数字を打つこととした(例：IV-29層)。



第11図 第1区全体図（中世造構面・古墳時代中期末～奈良時代造構面）・土層断面図

第2節 I区の調査

1. 調査区の概要

調査区は昭和62年度調査のP-4s・P-5s・P-6の南側にあたり、昭和63年度調査のP-3を調査区中央に据える位置にある。調査区の幅約4m・長さ27m、東西方向に延びる調査区である。

調査区の南辺及び東辺は現代の石垣が積まれ、更に外側を通る現道からは調査前の盛土上面で約2m～3m高い。弥生時代後期の土壤層上から現道の高さまでは約1mの比高差がある。

弥生時代後期末の土壤層(Ⅲ層-54層)は調査区西端で標高約22.0mで出現し、東端では標高約21.8mで出現する。東西25mの距離で約0.2mと比高差は殆どなく、極緩やかに西へ向って傾斜する安定した面である。これに対し、南北方向では北西端の標高約22.0m、南西端の標高約21.8mと5m前後の距離で約0.2mの比高差をもっている。南に向かって傾斜する微高地上と考えられよう。土壤層自体の厚さは約20cm、幾つかの砂を挟むが分層にはいたらなかった。

弥生時代後期末から古墳時代後期にいたる堆積は、調査区の西半では48～53層が厚く堆積しており、これらの層は西から東へと徐々に傾斜をみせている。調査区西端と中央では約0.2mの比高差がある。これに対して東半では44・45・47・51層が自然流路の痕跡を含む複雑な堆積状況を見せており、調査区の西半が微高地上となり、東半は谷地形となる。P-3周辺が地形の変化点となるものであろう。43層は東半の堆積が安定する時点で最初に土壤化する層である。41層-42層は48・50層の上面が土壤化したものであるが、43層とほぼ同時期に形成されたと考えられる。古墳時代中～後期の古墳を構築している面は2面想定できるが、1号墳はこのⅣ層-42層上面で造られたと考えられる。東半の37層は自然流路であるが、この時点で埋没していたか、否かは不明である。古墳時代後期の土壤層(Ⅲ層-42層)は調査区西端で標高約22.7mで出現し、東端では標高約22.1m前後で出現する。比高差は約0.6m、西から東へ傾斜をみせる。

2号墳は1号墳築造後、東半の谷地形を埋める0.6m以上の堆積があった後造られている。標高約22.7m前後で検出した。後述する奈良時代の遺構と同一面で検出しており、上層が鎌倉時代の土壤層であることからみて、少なくとも鎌倉時代には上面が削平されたものと考えられる。1号墳との間には35・36層の堆積、35・36層の堆積によって更に顕著になった東半の谷の底部分の土壤化(34層)、更に谷部の埋没(26～33層)・埋没後の上面の土壤化(26・35層)を挟み、1・2号墳間の築造の間には幾らかの時間的な間隔を考えなければならない。

奈良時代の遺構(溝4・5)は2号墳と同一面より検出されている。溝は調査区の東端にあり、37・47層や30・31層といった自然流路に近い部分にある事から見て、奈良時代一溝掘削時にも西から東への傾斜は残っていたものと思われる。

鎌倉時代の土壤層X層-10層は標高約22.8mで出現し、調査区全域に水平に残るが、部分的

に上面の水田耕作によって削られている。

中世の水田址(IX-5層)は鎌倉時代の土壤層の約15cm上面に位置する。洪水砂層(VII-3・4層)は鎌倉時代の遺物を含み調査区東端を掠め南南西へと走っている。

このように、調査の結果、中世の水田址・鎌倉時代の石垣施設及び溝・奈良時代と考えられる貼り石遺構及び溝・古墳時代後期の方形墳2基・弥生時代後期の土壤層(包含層)を検出した。このうち、遺構面としては、奈良時代と考えられる貼り石遺構と溝を古墳時代後期の方形墳2基と同一面で検出しているため、都合5面を把握した。弥生時代後期の土壤層(包含層)は調査区全域、古墳時代中～後期の方形墳2基は調査区の中央より西より、奈良時代の遺構は調査区の東端、鎌倉時代の遺構および中世から近世にかけての水田址は調査区全域に及ぶ。また、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての堆積により、調査区の西半が微高地として高く東半は谷地形となつたため、古墳時代後期から奈良時代にかけて数度の自然流路が形成されたと考えられるのである。

出土遺物は、弥生時代後期～近世にかけての遺物が出土しているが、遺構・遺構面に伴うものは、弥生土器(17・18)・中世の土器皿(35～38)・壺(39・40)・瓦器皿(41～43)・輸入陶磁器(44)のみで図示した他のものはすべて洪水砂による流入物である。

2. 遺構

1号墳(第12図・第13図)

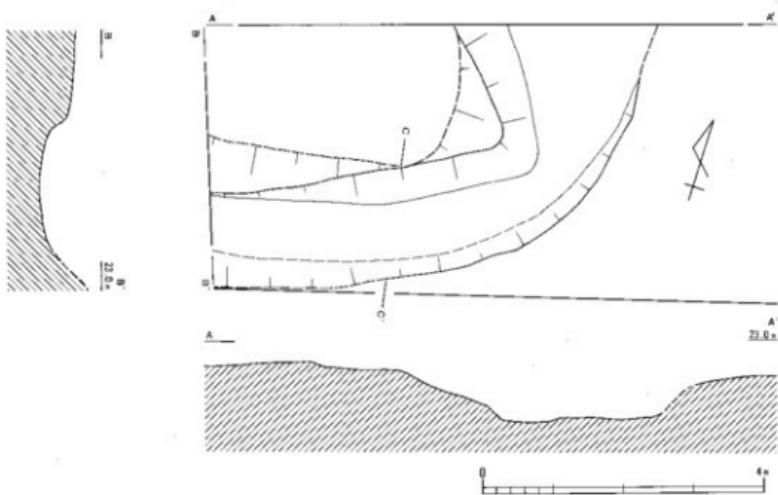
調査区西端において検出した。調査範囲の制約から、馬溝がくの字に屈曲する部分即ち方形墳の南東隅コーナー部分と考えられる極限られた部分を検出したに止まる。

実際に検出された遺構は調査区西端において北壁より出、「くの字」に屈曲して西壁へと伸びる溝であり、埋葬施設・埴丘盛土・貼り石・供獻土器等は確認されていない。しかし、住吉宮町遺跡群の他の古墳の検出例からみてくの字に曲がるこの溝は古墳の一部であると考えられる。

検出された部分は極一部であり、加えて周溝は砂地に掘り込まれるために崩壊が激しく、形状・規模とともに不明瞭な点が多い。周溝の走行は、N11°W前後から調査区内で、N79°E前後へと「く」の字に屈曲するが、その度合いは、溝西肩(埴丘側)では直角に近く、溝東肩(周溝外縁側)では円弧状に近く曲がるものと考えられる。断面形状は概して浅いU字状を呈している。規模は溝としての現状の規模で、北壁では幅約4.5m・深さ約0.6m、西壁では幅約2.3m・深さ約0.4mをはかる。溝肩は、埴丘側即ち、西もしくは北肩がやや緩やかに立ち上がっている。

溝の埋土は4層に細分が可能である。溝の外側より土が順次流入し埋没していったと推測される。溝底には灰黒色細砂が堆積し土壤化している。

埴丘側は周溝外側に比べて約15cm高く検出しているが、これは、周溝掘削時の地形が西から東へ向けて緩やかに傾斜しているためである。埴丘部分はすべて自然堆積した砂層であり、人為的な盛土は残存してはいない。



第12図 1号墳

限られた資料から推定できる古墳は、主軸方位をN11°W前後もしくはN79°E前後に持つ方形もしくは長方形墳である。出土遺物はなく、時期は不明である。但し、溝は2号墳の周溝と切り合い先行する。また、3号墳とは、層序関係からみる限り、ほぼ同一の地表面上で構築されていると考えられる。

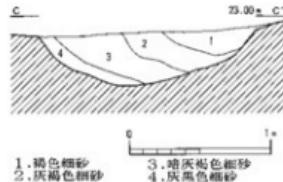
2号墳（第14図）

調査区中央において検出された。主軸方位をN18°W前後もしくはN72°E前後に持つ方形墳もしくは長方形墳である。調査範囲の制約から、周溝・墳丘の大半は調査区の北側にあり、周溝によって画された南側の一辺および南西・南東部のコーナー、西・東側の一部を検出している。

実際に検出された遺構は『コの字』に屈曲して北壁へと伸びる溝であり、埋葬施設・墳丘盛土・貼り石・供獻土器等は確認されていない。しかし、住吉宮町遺跡群の他の古墳の検出例からみて『コの字』に曲がる溝は古墳の周溝であると考えられる。

規模は南西・南東の墳裾間で約12.8m、周溝外縁の隅間約16.6mを計り、墳丘は南北方向に約2m分検出している。墳丘は削平され、墳丘の高まりは残っていない。

溝としての現状の規模は、幅約2m・深さ約0.6m～幅約



第13図 1号墳周溝土層断面図

4 m・深さ約0.8mを計る。断面形状は浅い逆台形を呈しており、墳壠部分に向けてやや深く傾斜を見せてている。

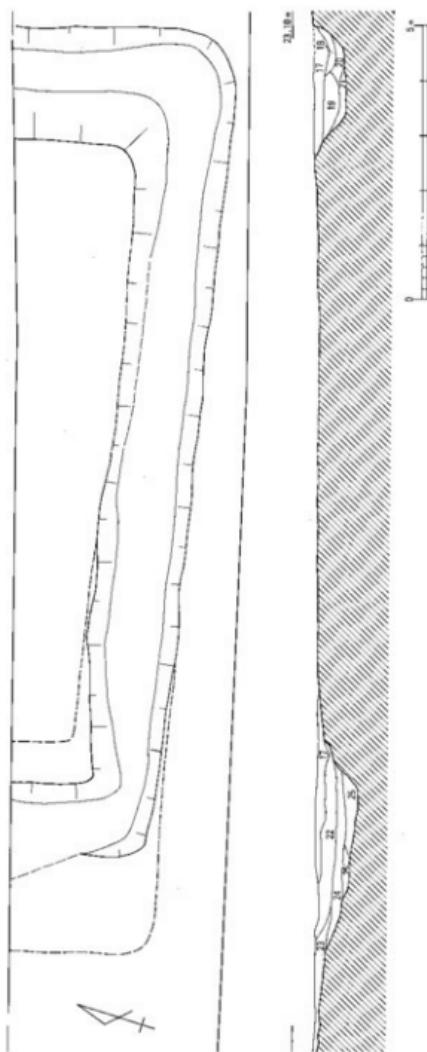
溝の埋土は3層に大別できる。溝の外側より土が順次流入し埋没していったと推測される。下層は土壤化しており、中層は砂が堆積、上層は再び土壤化している。

出土遺物はなく、時期は不明である。但し、溝は1号墳の周溝と切り合い後出する。また、層序関係からみる限り、1・3号墳が構築された時点では存在している谷もしくは地形の傾斜が、2号墳の周溝が掘削される時点では完全に埋没しており、谷を埋める堆積層の中に幾つかの土壤層があることから、1・3号墳との間に若干の時間差があるものと推測される。

溝 4 (第11図)

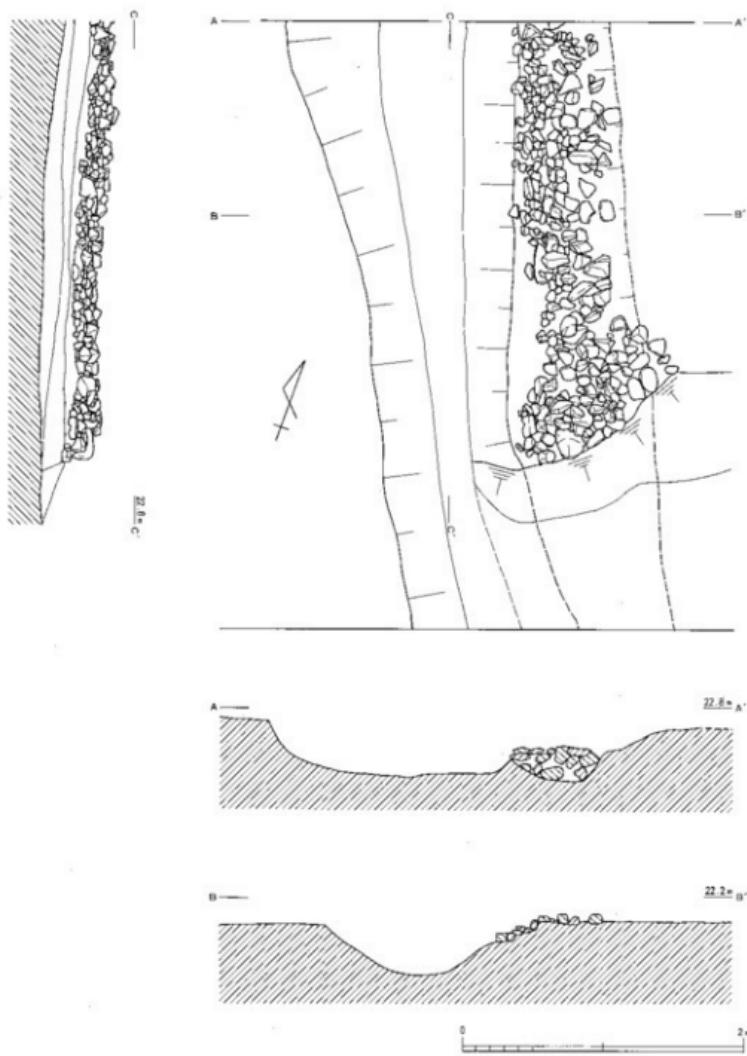
調査区東端の南北断面によって確認した。南北方向(N16°W前後)に走行をもち、調査区を横断する。幅約4m・深さ約0.9m～幅約2m・深さ約0.5mの規模をもつ。断面形状は浅い皿上の中央が皿に半円形に落ち込んだ2段掘りの形状をもっている。

溝内の堆積は、やや粒子の細かな細砂層が溜まる下層、シルト層の中層、洪水砂層が溜まる上層に分かれる。溝肩は、上面より溝5・



第14図 2号墳

(上陸番号は第11図と同じ)



第15図 溝5

6が掘りこまれているため判然とせず、あるいは、溝5の肩部を構成している土壤化した第14層が最終的に堆積した土である可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

溝 5 (第15図)

調査区東端で検出した。南北方向 (N28°W前後) に走行をもち、調査区を横断する。東肩部に護岸のためと思われる貼り石を伴った溝である。溝自体の規模は、幅約1.6m・深さ約0.4m～幅約1.2m・深さ約0.3mである。断面形状は浅い皿を呈している。

溝内の堆積は、溝底に部分的に若干粗砂が堆積しているが、概して粒子の細かいシルト混じり細砂が堆積している。

貼り石は、径15cm前後の石を60cm程度の幅で東肩部に貼りつけている。貼り石は、溝の南半では一石づつ、溝肩から立ち上がった平坦部にいたる部分にまで貼りつけられているが、北半では、溝肩を掘り窪め、多量の石を使用している。また、溝肩付近では径30cm前後の大きめの石を据えており、貼り石の裾の並びを意識していると思われる。

溝4と重なり、同じ走行をもつことから、溝5は溝4が埋没した時点で掘り直しによって出来た溝の可能性があるが、判然とはしない。遺物は、貼り石の間より、須恵器壺口頭部片、布目瓦片、溝内より須恵器杯片が出土している。

溝 6 (第11図)

調査区東端で検出した。南北方向 (N13°W前後) に走行をもち、調査区を横断する。

幅30cm前後、深さ45cm前後、浅い皿状に窪み更に箱形に落ちる断面形状をもつ。

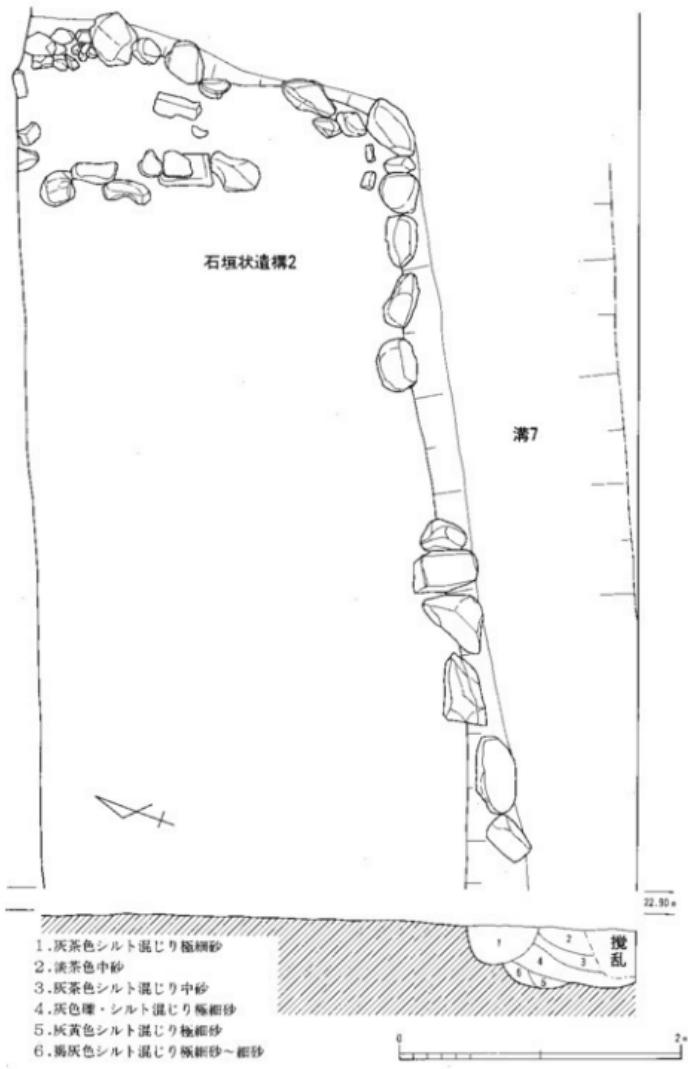
溝は砂礫によって埋没している。

遺物は、瓦器片が出土している。

石垣状造構2・溝7 (第16図)

調査区全域にわたる鎌倉時代の遺構である。石垣状造構2と溝7は、石垣の南側の列が溝7の溝肩を成していることから一つの遺構として捉えられるものである。石垣は検出状態では1石のみが巡っているが、石の上面が均一ではないこと、鎌倉時代の土壤層の検出される高さが石の上面よりもやや高いことからみて、当初は更に1段乃至は2段の石積みがあったものと考えられる。石垣状造構内には更に南北方向に1列の石列が検出されているが性格は不明である。石垣の並びは調査区の東半において検出されているが、西にのびる溝7の北肩の形状が西半では斜め傾斜を見せていることからみて、当初は全域にわたって石垣を組んでいたものと考えられる。

溝7は東西方向に走行をもち、調査区西端より東端へと伸びている。溝の東端は、調査区の東半において室町時代の洪水砂と近現代の搅乱によって削平を受けており、消失している。石垣状造構は、溝7の北側の溝肩に造られており、調査区の東端において北側へと屈曲している。このことからみて、溝4自体もまた、北側へと屈曲している可能性が強い。溝の南側の肩部は、



第16図 石垣状造構2・溝7

溝4が調査区の南端を掠めて走ることから不分明な部分が多いが、溝肩の高さについては、概して溝北側の石垣上の高さと差異はない。

出土遺物は石垣に囲まれた部分の土壤層より白磁碗・土師器小皿・皿、溝7より瓦器片が出士しており、鎌倉時代の遺構と考えられる。

水田の造作に伴う遺構（第11図 第I区全体図 中世遺構面）

鎌倉時代の遺構面上に堆積した5層上面で東西方向（N72°W前後）に走る段状の落ちを検出している。約10cmの段差をもつ。上層の土質から水田の造作に伴う段差と考えられる。段差を造る層位は、鎌倉時代以降と考えられる洪水砂に先行して出現することからみて、鎌倉時代に収まる時期を考えることが出来る。

第3節 II・III区の調査

1. 調査区の概要

II・III区は前述したように調査区としては一体のものであり、地区分けは調査工程上の便宜的なものにすぎないため、本項で一括して扱かう。IV区は更にIII区と接して東に設定しているが、断面精査による調査方法をとることから、別項にて記述を行う。

II・III区はI区とは南北に通る約5mの道路を挟み、東側に設定した調査区である。昭和62年度調査のP-7・8^{III}の南側にあたり、昭和63年度のP-1・2をII区内に据える位置にある。また、II・III区の南側にある灘生協関連のビルと、II・III区とビルとの間の道路の一部は昭和63年度に神戸市教育委員会によって発掘調査(南側は9次調査)^{III}が行われている。神戸市教育委員会によってその一部が調査された古墳(3・4号墳)は本調査区のII区に残る部分のうち更に一部が調査対象となった。(第10図参照)

調査区の現状はI区と同様に南辺と西辺の道路に面した部分に現代の石垣が積まれている。調査時の盛土上面と南側・西側の石垣下を通る道路とは大きく段差をもっており、その比高差は約2mである。また、後述する弥生時代後期末の土壤層上との比高差は約1.5mで、道路側が高い。

調査の結果、近世の集石土壤・古墳2基・古墳時代後期の旧河道・弥生時代後期の土壤層(包含層)を検出した。また、断面では以下に述べるように古墳時代後期の土壤層・奈良時代から鎌倉時代の堆積層・近世の水田・畑を確認している。検出した遺構はII・III区を東流する旧河道を除き、すべてII区において検出しているが、III区の大半を土石流が削りとっているため、もともとの遺構の存在状況については不明な点が多い。

弥生時代後期末の土壤層(III層-49層)は調査区西端で標高22.2mで出現し、II区中央で古墳時代後期の旧河道によって削られ消失している。消失部分での標高は22.1mで比高差は少ない。また、III区では旧河道の肩部でも層が検出されず、弥生時代後期末以前の層(II-53層)が出現している。土壤層はI区に比べ緩やかに波打っているが、I区との比高差を比べても比較的なだらかな傾斜を示している。

III区で土壤層が検出出来ないことからみても弥生時代後期末の土壤層は余り傾斜せずに標高22m前後で水平に近く堆積していたものと推測される。また、土壤層自体の厚さは約15cm、幾つかの層に細分できるが遺物の分層取り上げには至らなかった。弥生時代後期末から古墳時代後期の旧河道が形成されるまでの堆積層(46~48層)はシルト~粗砂が細かく堆積しており、I区の東半と同じ堆積状況が続いている。古墳時代後期の旧河道は堆積層(46~48層)の上面を肩としている。II区からIII区を経てIV区へと蛇行しながら西北西から東南東への走行が検出された。旧河道は2基の古墳が築造される時点では埋没し、古墳時代中・後期の遺構面を構

成するⅩ-29層は標高22.4m前後で出現し、調査区の全域で検出されている。Ⅹ-29層は層序・標高からみてI区の古墳時代中・後期の旧地表(Ⅹ-42層)に相当する。

3・4号墳の周溝を埋没させる洪水砂Ⅺ-21層は6世紀末の所産とされるが、遺構内に堆積する以外は後世の削平を受けて残存していない。また、I区で出現している2号墳築造時の地表(Ⅹ層)はII・III区ではない。洪水砂もしくは洪水砂を削平した後世の水田造成等によって消失しているものと考えられる。

Ⅹ-29層の上に堆積するⅪ層(12~22層)には奈良時代から鎌倉時代にかけての遺物が含まれており、それに対応する時期の数枚の水田層を含む堆積層であると考えられる。Ⅹ-1層は特にII区では洪水砂層によって乱れた層序となっている。土石流を挟みⅢ区東半では18・19層は安定した水平堆積をみせており、あるいは同土質の異なった層位であるかもしれない。3号墳墳丘上の攪乱坑(9層)は12層を掘り込んで造っており、坑内からは瓦器片が出土している。12層上面が鎌倉時代の遺構面にあたる可能性がある。

水田耕作土(Ⅶ-8層)はⅢ区で土石流に削りとられている以外には調査区全域で検出されている。耕作土中より伊万里焼皿片が出土しており江戸時代後期前後の水田と考えられる。土壤4はⅦ-8層を切っている。Ⅵ-7層はⅢ区を南北に貫通する土石流である。更に南の神戸市教育委員会の発掘調査(9次調査)によっても検出されている。Ⅴ-6層は土石流流入後の畑である。18世紀後半以降の陶器(45)を出土している。Ⅳ-3・4・5層は近代の耕作土であるが、II区ではその大半を新しい時期の土石流によって削りとられている。

出土遺物は、弥生時代後期~近世にかけての遺物が出土している。遺構にともなうものは3号墳周溝出土の(6)・土壤3出土の(7)のみである。古墳時代後期土壤層出土の遺物のうち(24・25・31)は3号墳周溝東側約2mの部分より比較的まとまって出土している。3号墳の祭祀に伴う遺物の可能性があるが、遺構を検出することはできなかった。

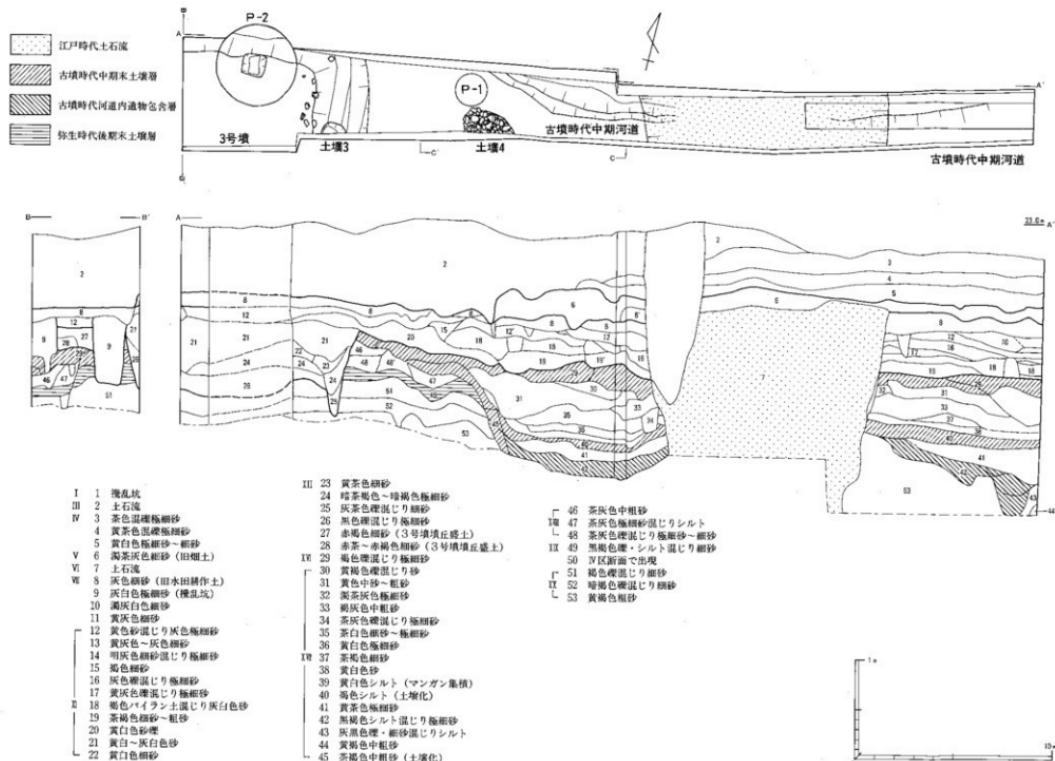
2. 遺構

3号墳(第18図)

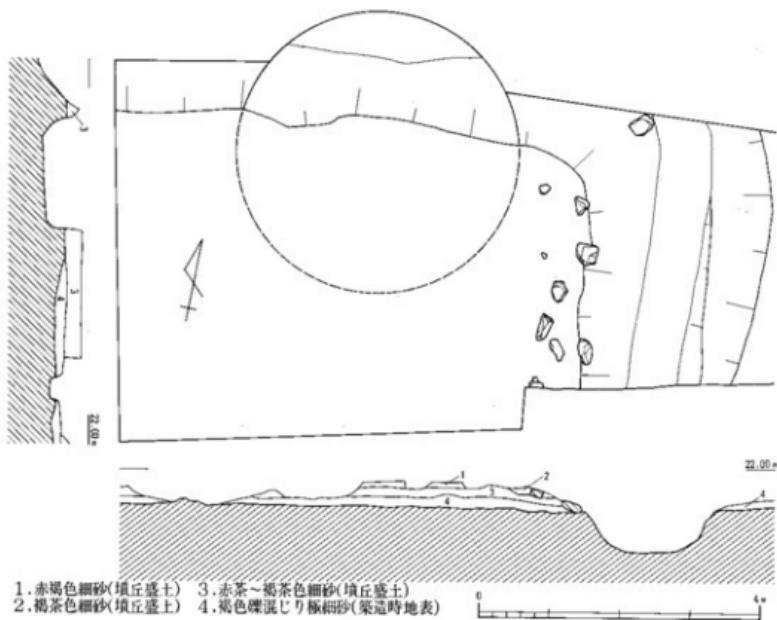
3号墳は、昭和63年度に神戸市教育委員会が調査をおこなった第9次調査の3号墳と同一である。橋脚基礎(P-2)部分の調査と今回の調査で北半の約2/3が調査範囲内に入り、調査を行った。調査出来たのは図示した如く、3号墳の約1/4強に過ぎない。周溝は旧河道が埋没した後に土壤化したⅩ-29層を切って掘削されており、Ⅹ-29層は墳丘盛土下においても検出されている。

検出したうちの南北方向の周溝で計る規模は現況で上幅約2.5m、下幅約0.7m、深さ約0.75m、断面形状が逆台形状を呈する。埋土は、大まかには上下2層にわかれ、下層は土壤化したシルト混じりの極細砂、上層は土壤3をも埋没させている洪水砂である。

墳丘上の覆土は奈良時代から鎌倉時代にかけての水田土壤であり、墳丘上に奈良時代及び鎌倉時代の土壤が掘り込まれているが、概して墳丘の遺存状況は良く検出した墳裾から墳丘上面



第17図 II・III区全体図・土層断面図



第18図 3号墳

までの高さは約1mを計り、周溝外と埴丘上面との比高差は約0.2mを計る。

旧地表・地山を削り出した部分は約0.8mで旧地表上に約0.2mの盛り土が残存している。この盛土は大きく2層に分けることが可能である。

また、埴丘の東辺で貼り石列が検出されている。貼り石は、密度の濃い状況ではないが、埴丘盛土上で一列、埴丘盛土と旧地表の境部分で一列か二列の貼り石を巡らせていたと考えられる。また、貼り石の検出は北辺では皆無であることから、当初より北辺には施されていなかった可能性が強い。埴裾に位置する石は故意の貼り石であるか、早い時期の埴丘からの転石であるかは明確にはできなかった。

今回の調査結果と神戸市教育委員会の調査結果²³⁾を勘案すれば、3号墳は主軸をN11°W前後にとり、全長が南北約16m・東西約13.5m、埴丘長が南北約12m・東西約10m・高さ1m以上の規模の長方形の古墳であると考えられる。

埋葬主体については、今回の調査においても検出出来なかった。石垣部分もしくは現道路下の未調査部分にあった可能性も残るが、未調査として残る範囲は余りにも少なく、加えて埴丘

の中心が本調査区部分にあると考えられることから、削平を受け消失している可能性が強い。6世紀末の洪水砂堆積層が墳丘上では検出されないことからみても、後世の水田の造作による削平が深く及んだことが推測される。

出土遺物は、周溝内より、土師器壺・須恵器壺胴部片が出土している。

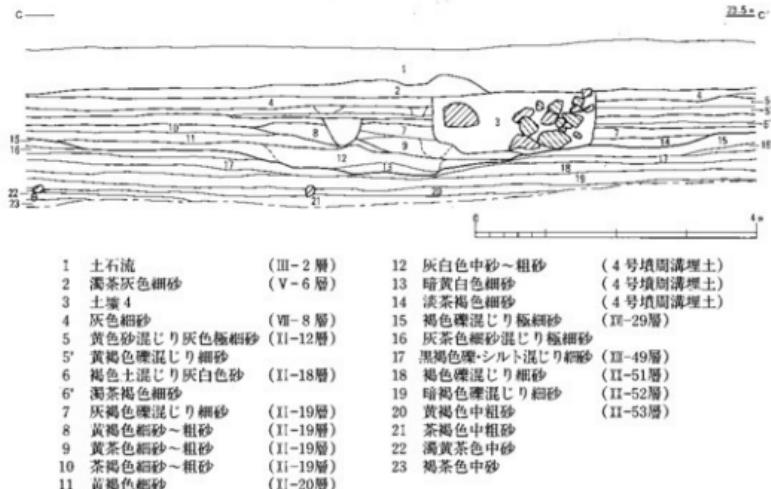
4号墳周溝（第19図）

4号墳は、昭和63年度に神戸市教育委員会が調査をおこなった第9次調査の4号墳と同一である。3号墳の東側に位置し、3号墳とほぼ同方位をとる方形墳である。

今回の調査で周溝の北辺が一部調査範囲内に入った。

調査の不手際から、平面では検出出来ず、断面による検出のみとなった。層位的には3号墳と同じくⅩ-29層を周溝の肩としている。断面において検出した溝は長さ9.2m、深さは約0.1~約0.3m。検出部分の中央部が凹み、深い形状である。

神戸市教育委員会の調査結果を参考にすれば、本調査区に含まれる4号墳の周溝部分はその北東のコーナー部分にあたることから、断面において中央部が凹む形状になったものと考えられる。周溝を埋める堆積土は大きく2層に分かれ、下層は周溝の両肩部に堆積した土壤化した層-淡茶褐色細砂、上層は中央部を中心に堆積する細砂~粗砂の洪水砂である。上層の洪水砂は3号墳周溝及び神戸市教育委員会によって調査された古墳を埋没させている6世紀末の洪水砂である。^{註4}



第19図 4号墳・土壤4部分の土層断面図

土壤3 (第20図)

II区中央南壁際で検出した。3号墳周溝に切り込み、約1/2は調査区外にある。本来の形状は円形と考えられ、径約1.7m、深さ約0.5m、断面形状は半円に近い弓形である。

埋土は2層に分かれ、下層は淡黄茶色極細砂、上層は灰白色中細砂、更に最終的には、6世紀末の洪水砂によって埋没している。

出土遺物は、須恵器台付壺の脚台片が出土しており、6世紀後半～末の年代が与えられる。

土壤4 (第19図)

II区東半で南壁際で検出した。4号墳周溝に切り込み、一部は調査区外にある。本来の形状・規模はこのため不分明であるが、横円径もしくは歪な隅丸方形と思われる。

壁際での幅は約2.3m・深さは約0.9m、断面形状は箱形をなしている。

土壤内には、茶色土と共に径20cm前後の石が密に入っている。平面精査・断面精査においても石を組んだ形跡はない。投入したものであろう。土壤が江戸時代後期と考えられる水田を掘り込み、18世紀以降と考えられる畑に先行することから、江戸時代後期の造構と考えられる。

古墳時代中期末頃の河道

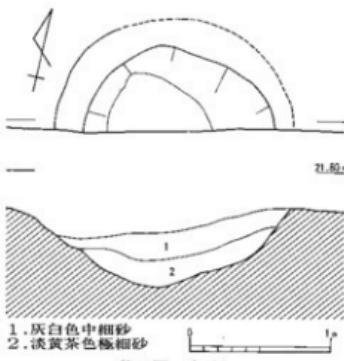
堆積土質層(46～48層)の上面を肩としている。なだらかなU字形の断面形をもつ。II区からIII区を経てIV区へと蛇行しながらの西北西から東南東への走行が検出された。

III区の中央部を近世の土石流が貫通しているため、II区とIII区の河道が確実に同一河道であるとの確証はない。古墳時代中期頃の旧地形は東南方向へ走る小支谷によって掌状の凹凸が存在する。このことは従来の橋脚基礎部分の調査においても判明しており³⁵、並行する別の流路である可能性もある。

しかし、基本的な堆積状況が同じであること、流路の走行が同じであること、幅・深さとともに同じ規模であること、同時期の遺物を出土することから、今回の報告では同一の河道と認識して記述を行う。

規模は幅についてはIV区において両肩を確認したところ約4m・深さ約1mを計る。

河道の層位は基本的には、大きく2層に分けることができる。下層(40～45層)は間に一部洪水砂を挟むが、黒色系のシルトよりなる比較的長時間の堆積であり、図示した出土遺物の全てがこの層位より出土している。上層(30～36層)は洪水砂による比較的短時間の堆積よりなり、遺物の出土も乏しい。河道の上面を覆う29層は3号墳構築時の地表と考えられ、調査区全域に見受けられることから旧河道は29層が形成される時点では埋没していたものと考えられる。但



第20図 土壌3

し、断面図からも伺えるように29層は旧河道の上では凹状に堆積しており、更に上層の18～20層もまた、凹地に堆積した状態を見せてている。河道は古墳時代中期のうちに埋没しながらも奈良時代に至るまで、若干の凹みを地形に残していたと考えられる。

II・III区における古墳時代中期末頃の遺構面の出現レベルはII区北壁西端で標高約21.8m、III区東端では標高約21.4m、南壁西端で標高約21.5m、III区東端でも標高約21.4mと南北方向にやや傾斜をみせ、西方向へも緩やかな傾斜をみせている。後述するが、II-29層はIV区においても標高約21.3m前後に存在しており、III区から引き続き平坦な遺構面が続いている。

これについて、平成元年度の調査区の北側に平行して行われている昭和62年度の橋脚基礎部分の調査では、II区の北側に設定されたP-7・P-8では標高約22.0mと標高約21.5mで遺構面を検出しており、報告者はP-7地点を小谷地形の傾斜変換点として捉え、北西から南東への落ち込みを指摘している。橋脚基礎部分の調査での遺構面の出現レベルは更にIII区・IV区の北側にあたるP-9・P-10では標高約21.5mと標高約20.5mを測り緩やかな傾斜をみせている。遺構面の深さを追う限り、平成元年度の調査結果と同じく東に向かう緩やかな傾斜を持つ微高地の存在が考えられるのである。

今回検出した旧河道は位置的には、これら微高地の縁辺部を舐めるように東流していたものと考えられる。

註1 渡辺 昇 「住吉宮町遺跡群！」 兵庫県教育委員会 1988年

註2 「住吉宮町遺跡現地説明会資料」 神戸市教育委員会 1988年5月・8月
『新修神戸市史』 神戸市 1990年

註3 「住吉宮町遺跡現地説明会資料」 神戸市教育委員会 1988年8月

註4 高橋 学「付論 芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅰ」「北青木遺跡」 兵庫県教育委員会 1986年

註5 渡辺 昇氏の御教示。

第4節 IV区の調査（第21図）

IV区は幅約2m・全長約37mの細長い調査区である。調査区の幅に制約があるため、掘削はすべて機械力により、断面精査を主に調査をおこなった。

基本的な層序はII・III区と同一である。弥生時代後期の土壤層を含む上位の堆積層はIV区では出現しない。奈良時代以後の水田造作等によって削平されているものと考えられる。

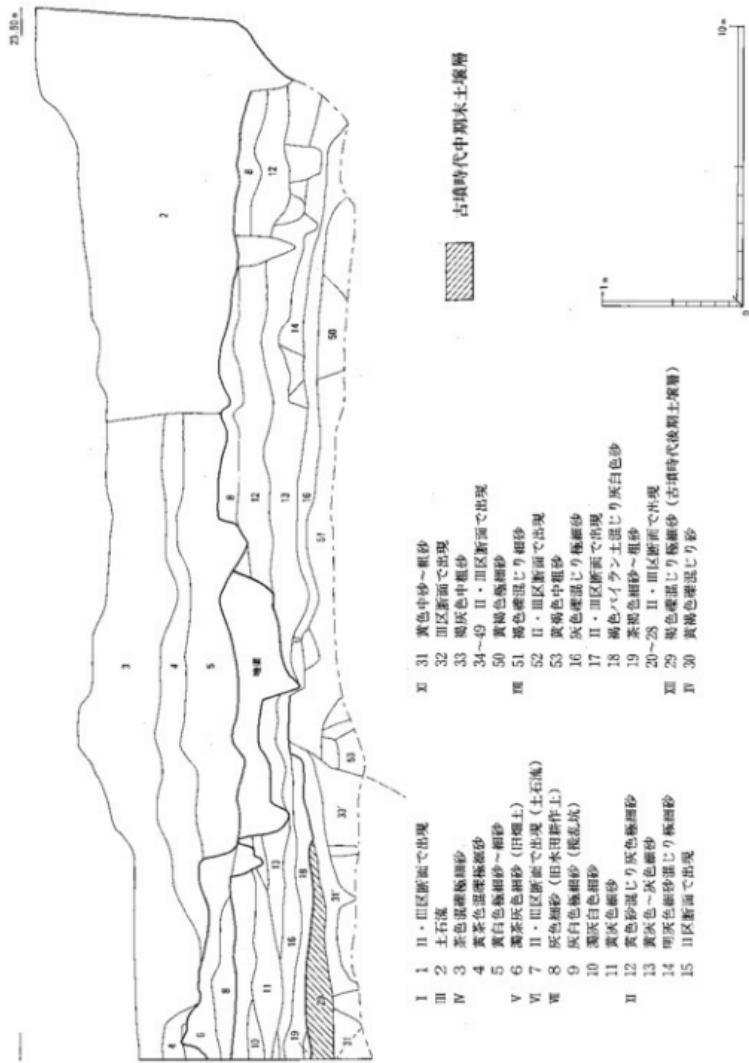
II区より東流する古墳時代後期の旧河道はIV区では蛇行しつつ北東方向へ抜けている。河道の両幅は調査区の両断面からみて約4m前後と推測される。河道の肩部を形成する洪水砂層はII・III区の51・53層即ち弥生時代後期以前の堆積が出現している。

古墳時代中期末頃の遺構面を構成する土壤（II-29層）はIV区では辛うじて旧河道の凹部に土壤層が残っており追跡が可能である。北壁西端で標高約21.4m、南壁西端で約21.3mを測る。旧河道の外では、後世の削平を受けており見ることは出来ない。

奈良時代から鎌倉時代にかけての堆積と考えられるII層は、IV区の西半ではII・III区と同様に数枚の水田層を含む複雑な層序を呈しているが、暗渠を挟む東半では12・13・14層で、比較的単純な水平堆積を見せていている。いずれも水田層と考えられる。更に下層の16層はIV区の全域にわたる安定した水平堆積層である。調査区中央で段差をもっており、恐らく水田の造作によるものと考えられる。

III層の土石流は調査区の東半部に出現しており、江戸時代の水田面までを削り去っている。近代の耕作土であるIV層（3・4・5層）はII・III区に比べて厚く堆積しており、東へ向けて耕作面に幾つかの段差が付いている。

出土遺物は機械掘削を主としたため殆どなく、若干の奈良時代の須恵器片を出土している。



第21図 IV区土層断面図

第5節 平成元年度調査分の出土遺物

出土遺物は、古墳時代中期末頃の河道の遺物を除けばその大半を占めるものは洪水砂による流入遺物であった。このため、図示出来た遺物は鉄製品を含め48点に過ぎない。以下に出土遺物について述べるが、この遺物の少なさゆえに地区ごとの記述を行わず、本節で一括して述べることとした。また、出土土器の個々の形態・技法については観察表に一括して記した。本項では重複するが、土器の説明上必要な事項については記すこととする。

1. 遺構出土の土器（第22図）

遺構出土の遺物のうち図化できたものは2点に過ぎない。土師器壺（6）は3号墳周溝内より出土している。短く立ち上がり外反する口縁部に、球状に近い体部をもつ。底部を欠くがおそらく丸底で有ろう。内外面の調整はナデと考えられる。類似する器形のものは『神楽遺跡 SD03』^{#1}・『松野遺跡 SD02』^{#2}で5世紀後半の須恵器を伴い出土している。

須恵器脚部（7）は土壤3より出土している。台付長頸壺の脚部と考えられる。田辺編年TK217^{#3}に併行する時期のものであろう。

2. 古墳時代中期末頃の河道出土の土器（第22図）

(8)～(10)は土師器高杯である。(8)・(9)は口縁端部が内側に肥厚し、上部に面をもつものである。(10)は口縁端部を丸く收めるものである。(9)(10)はほぼ平らな内底面から立ち上がるが、(8)は残存状況から見るかぎり、やや深く丸みをおびた内底面をもつ。法量もやや大きい。栄根遺跡^{#4}・土師遺跡^{#5}などで田辺編年TK208型式の須恵器と供叢を見る。

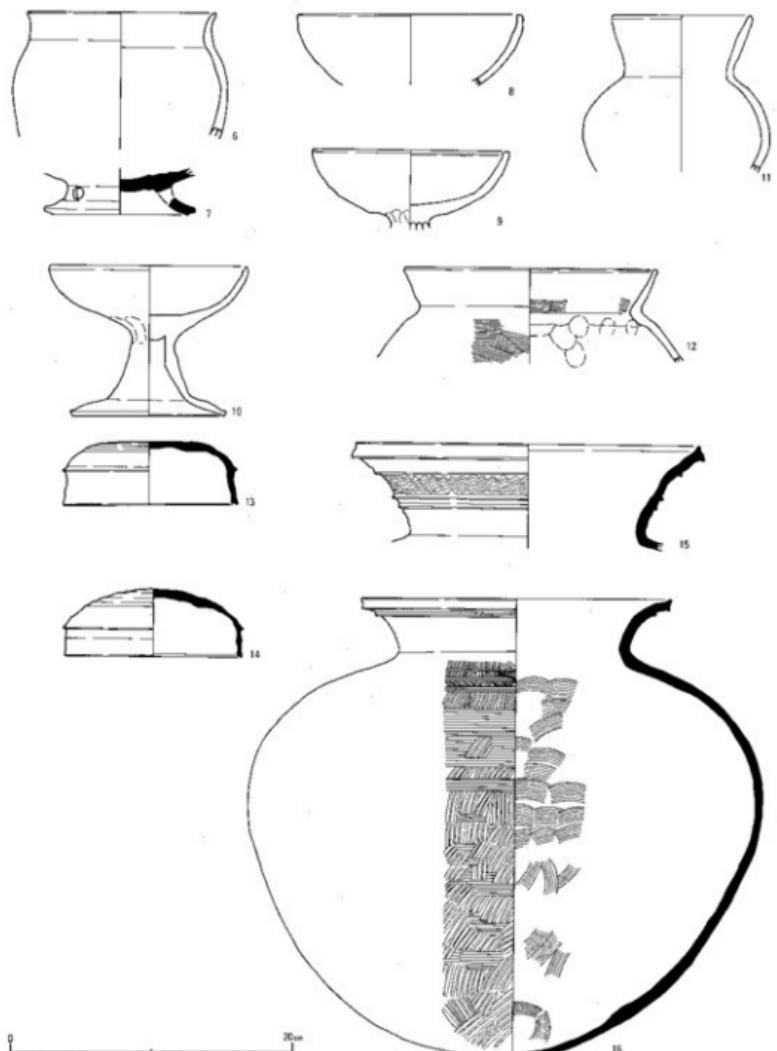
(11)は土師器小型丸底壺。頸部がしまり扁球形の体部をもつ。家原・堂ノ元遺跡^{#6}などで古式須恵器と供叢を見る。(12)は土師器壺。口縁端部は内側に傾き面をもつ。(13)(14)は須恵器壺蓋。(13)は比較的平坦な天井部をもち、1/2前後までヘラ削りを施す。器高の1/2強を稜以下が占めている。(14)は比較的丸い天井部をもち、1/2前後までヘラ削りを施す。稜以下が占めるのは器高の1/2弱に止まる。田辺編年TK23型式、中村編年のI型式第4段階^{#7}に併行するものと考えられる。

(15)(16)はともに中型の須恵器壺。(16)は内面のタタキ目を半擦り消しにする。田辺編年TK23型式、中村編年のI型式第4段階に併行するものと考えられる。

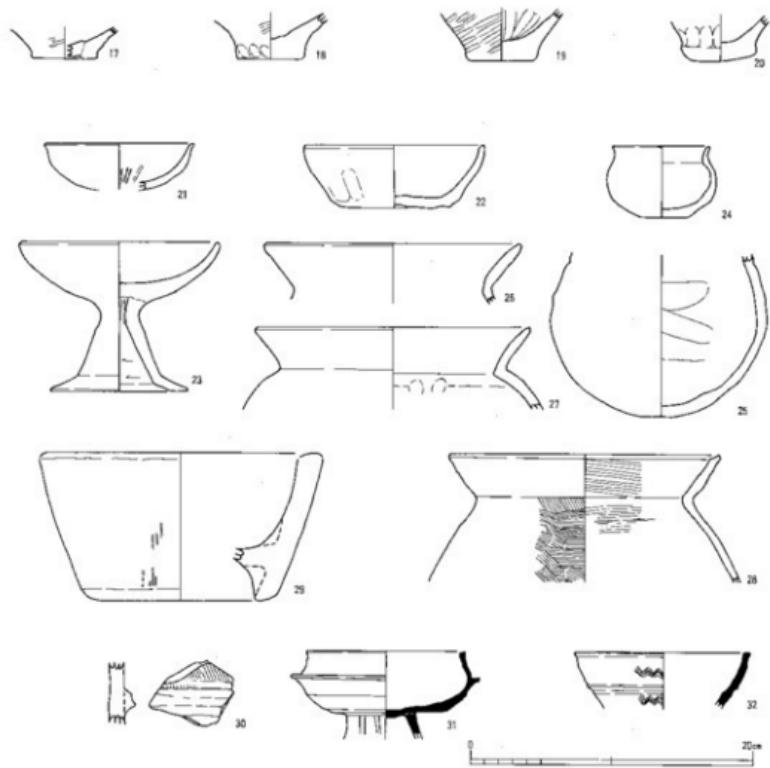
3. 包含層出土の土器（第23・24図）

包含層の遺物は28点図示した。(17)から(20)は弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての壺底部である。(21)(22)は土師器壺。(21)は丸底の形態。放射状の暗文を施す。(22)は平底。ナデによる調整を施す。

(23)は土師器高杯。旧河遺出土の(10)比べやや厚手ではあるが、同形態である。(24)は小型の壺。器高5.1cm・腹径7.8cmの偏球形の小品である。



第22図 遺構および古墳時代中期末頃の河道出土土器



第23図 包含層出土の弥生時代後期・古墳時代中期末頃の土器

(25)は土師器壺。球形の体部をもつ。(26)～(28)は土師器壺。(26)(27)はやや外反氣味に開く口縁部をもつ。

(28)は肩の落ちた器形である。口縁端部上面を拡張し面をもっている。

(29)は円筒形の性格・用途不明の土製品である。若干外方へ開く円筒形の器形である。上端部は磨滅が激しく口縁端部であるか、擬口縁であるか、破断面であるか否かの明確な判断はつけ難いが、本稿では口縁端部であると考えている。内面下端より約1/3の部分において底面と考えられる面を造り出しており、更に体部との接合部に上下より粘土の継ぎ足しを行っている(破線図示部分)。このため、底部内外面ともに丸みをおびた椀底を呈している。製作技法の点では、底部疊み付き部分に埴輪にみられる紐造りの痕跡が見受けられる。²⁵

(30) は円筒埴輪の底部分である。

(31) は須恵器有蓋高杯である。脚部を欠く。口縁端部に段を明瞭に持ついわゆるB類の杯部をもつ。受け部は水平に張り出し、ロクロ削りは体部の約1/2に施されており、田辺編年TK23型式、中村編年のI型式第4段階に併行するものと考えられる。

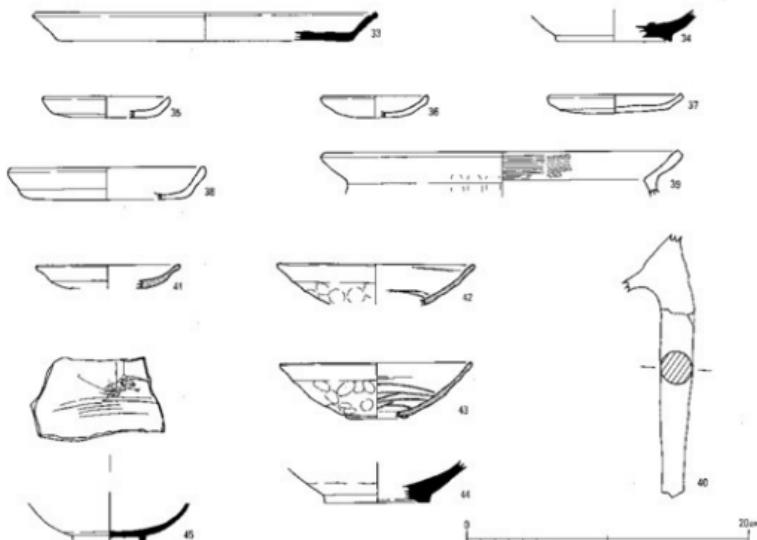
(32) は須恵器縁の口縁部である。口縁端部に段を明瞭に持ち、口縁中位に凸線を巡らせその上下に波状文を施す。中村編年のI型式第4段階に併行するものと考えられる。

(33) は須恵器皿。磨滅が激しいが、形態・法量・口縁部内側の沈線から平城京編年III期の皿C1¹³にあたると考えられる。8世紀中頃の遺物である。

(34) は縁釉陶器碗の底部である。貼り付け高台・濃緑色の釉・露胎部の淡赤褐色の焼成から、近江系ではないか¹⁴と考えられる。10世紀後葉の時期を与えられよう。

(35)～(38) は土師器皿である。小皿(35)(37)・皿(38)は体部に1段撫でを施し、口縁部に面取りをほどこしている。宇野分類D 5類¹⁵に入るものと考えられる。(35)(37)(38)は宇野編年中世京都I期～12世紀代¹⁶にあたる遺物と考えられる。(38)の面取りはやや甘くなっている。

(36) は白色調の強い製品で、(35)(37)(38)とは胎土からも産地の違う製品である。磨滅が酷く、全体の調整は断定出来兼ねるが、体部に1段撫でを施し、口縁部に面取りを施しているものと



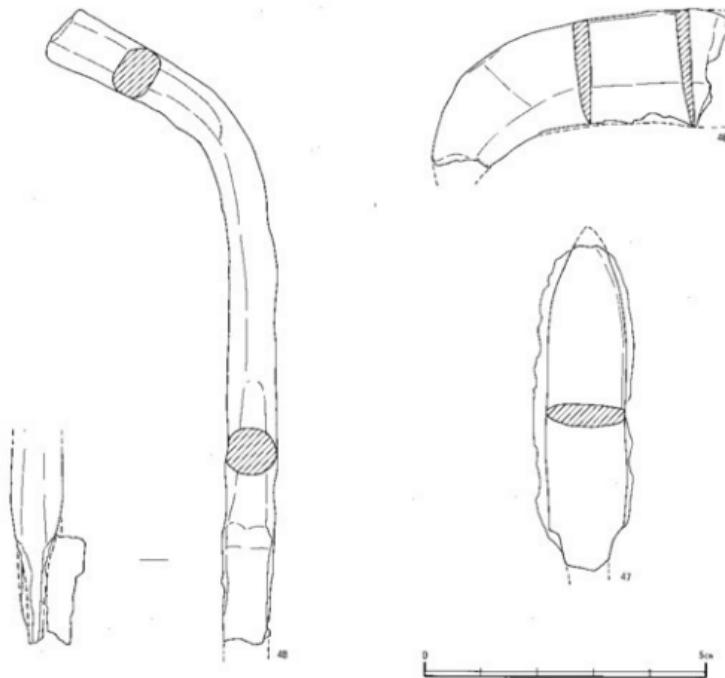
第24図 包含層出土の奈良時代～江戸時代の土器

思われる。(35)(37)(38)と同時期としてよいものであろう。

(39)は土堀口縁部である。くの字に屈曲する口縁部に浅い突起が付くものと考えられる。頭部外面には指押さえを施す。森北町遺跡³³・西宮神社境内地内³⁴より同形態の堀が出土している。また、(40)は土師壺堀もしくは羽釜の三足脚であるが、郡家遺跡(地蔵元地区)³⁵からは、(39)と同形態の堀に三足脚が付けられた個体が出土しており、胎土・色調からみて(39)に付く足の可能性が高い。遺物の時期は各遺跡とも鎌倉時代にあてており、(39)(40)の時期もまた、鎌倉時代と考えてよいであろう。

(41)～(43)は瓦器皿・椀である。(41)は内面口縁部付近に横方向の暗文が若干残るが磨滅が激しい。(42)(43)は和泉型の瓦器椀である。法量・調整から、尾上編年III-3期³⁶前後のものと考えられる。

(44)は白磁玉縁口縁碗の底部である。横田・森田編年IV類・II期³⁷に属する。



第25図 包含層出土の鉄製品

(45)は京焼系の施釉陶器碗である。内面に水草の絵付けがある。18世紀以降の時期を与えられる。^{註18}

4. 包含層出土の鉄製品（第25図）

鉄製品は出土した3点何れもII区古墳時代中期末頃の土壤層内より出土している。

鎌(46)は刃部が残存するのみで、先端部および基部については欠損している。片刃で、残存長5.4cm、刃部幅約1.8cm、厚さは峰で3mm、処理後の残存重量6.46gを計る。同時期の類例としては、桑原遺跡竪穴住居2の出土例^{註19}がある。

鉄鎌(47)は先端部および基部については欠損している。残存長5.8cm、幅約1.6cm、厚さは4mm、処理後の残存重量4.51gを計る。

(48)は「く」の字にまがる棒状の用途不明製品である。残存長11.3cm、径約0.9cm、処理後の残存重量27.14gを計る。製品は板金を疊み棒状に鍛造したものと考えられる。先端から約3cm付近より曲げており、先端に向けて徐々に肥厚させている。先端の断面形状は俵形である。後端へ向かっては径を変えず直ぐ棒状に造り、後端部の約2cm分を薄い板状マイナスドライバー状に鍛造している。形状・寸法からみて、鍔手刀子と報告されている黒石山古墳群12号墳第1主体部出土品^{註20}・刀子状の木工用鉄器と推定されている西神ニュータウン内遺跡第38地点ST01出土品^{註21}に類似しているが、(48)は後端部が欠損しているか否かが鑄造が激しく判然としないため、前提となる刀子か否かの判断がつかない状態である。^{註22}

図示した遺物の時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけて、古墳時代中期末頃、古墳時代後期末頃、奈良時代、鎌倉時代、江戸時代後期の遺物である。これらの時期の遺物は周辺の調査においても概して出土している時期の遺物である。周辺の調査において報告されている他の時期の遺物のうち、弥生時代中期の遺物は今回の調査では出土しておらず、室町時代の遺物は近世以降の遺物を伴う層位より若干出土しているに過ぎない。このことからも元年度の調査区では中世後半期以降江戸時代の中頃までの遺構・包含層が、それ以降の水田造作によって削りとられている事がわかる。

古墳時代中期末頃の旧地表は旧河道が埋没した後に形成されていると考えられるが、遺物の時期からみる限り、顕著な時期差は認めることは出来ない。

註1 菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1981年

註2 千種 浩『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1983年

註3 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古クラブ 1966年

『須恵器大成』角川書店 1981年

以下田辺編年はこの文献2冊を参照する。

- 註4 岡野慶隆『川西市栄根遺跡』川西市遺跡調査会 1990年
- 註5 十河稔郁『土師遺跡発掘調査報告-67街区第2次調査』『堺市文化財調査報告第九集』堺市教育委員会 1981年
- 註6 森下大輔『家原・堂ノ元遺跡』 加東郡教育委員会 1984年
- 註7 中村 浩『陶邑 Ⅲ』 大阪府教育委員会 1978年
以下中村編年はこの文献を参照する。
- 註8 岡崎正雄氏の御教示による。
- 岡崎正雄『開田2号墳』兵庫県教育委員会 1989年
- 註9 西 弘海『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1976年
- 註10 日永伊久男「近江産縁釉陶器の生産体制について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 1988年
近江産縁釉は神楽遺跡・日暮遺跡（神戸市教育委員会 1989年報告）で類例が報告されている。
- 註11 宇野隆夫「北白河北殿北辺の土器・陶磁器」「北白河北殿北辺の調査」京都大学埋蔵文化財調査報告II 1981年
- 註12 註11に同じ。
- 註13 西岡巧次『森北町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1978年
- 註14 古川久雄『西宮神社境内地発掘調査報告書』西宮市教育委員会 1983年
- 註15 西岡巧次『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986年
- 註16 尾上 実『南河内の瓦器概』『古文化論叢』1983年
- 註17 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978年
- 註18 岡田章一氏の御教示による。
- 註19 吉田 弇『桑原遺跡』兵庫県教育委員会 1986年
- 註20 森下大輔『黒石山古墳群』加東郡教育委員会 1986年
- 註21 千種 浩『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987年
- 註22 加古千恵子氏からは他方の先端についても折損の可能性の指摘を受けた。

第5章 まとめ

住吉宮町遺跡の調査は昭和63年度までに11次に及ぶ調査が実施されてきているが本報告で得られた調査成果は、これら過去の調査において報告された結果からさほど逸脱した事実はない。本報告の調査成果を以下に簡単にまとめておく。

1. 弥生時代後期末の土壤化した層位を調査区のほぼ全域で確認した。
2. 古墳時代中期末頃の東流する旧河道をII～IV区にかけて検出した。
3. 古墳時代中期末頃と考えられる古墳を4基、古墳と考えられる周溝を1ヶ所検出した。
4. 古墳時代後期末頃と考えられる土壤を検出した。
5. 奈良時代と考えられる溝をI区東端で検出した。
6. 鎌倉時代の溝及び石垣状遺構をI区で検出した。
7. 中世の水田址をI区で検出した。
8. 近世の水田址・畠地、土石流をII～IV区で検出した。

弥生時代後期末の土壤化した層位は平成元年度の調査ではほぼ全域で確認しているが遺構は今回の調査では推進工到達立坑以外では確認できなかった。また、過去の調査においてもJR東海道本線周辺では橋脚P-3N^⑪において土器棺が検出されているのみで、報告者も北側への遺跡の広がりを推測している。弥生時代後期の遺跡は更に北側の坊ヶ塚遺跡の調査時に検出されており、この様な調査結果からみてI～IV区の調査区は弥生時代後期末には遺跡の縁辺であって、弥生時代後期の遺跡はI～IV区に向かって北側から張り出している微高地にその中心があったことが推測される。

周辺の微地形については『住吉宮町遺跡群II』^⑫に詳しく述べるが、大きくみて坊ヶ塚遺跡の東側を南流して本調査のIII区を南へ向けて通る土石流と、坊ヶ塚遺跡の西側を南流して本住吉神社東側に流れる旧河道が指摘されている。少なくとも古墳時代中期前後には本住吉神社東側に流れる旧河道を挟み大きく2つの微高地が存在したことは認識できる。

今回報告した調査区はすべてその旧河道の東側にあると考えられ、古墳を築造している遺構面（古墳時代中期末頃の土壤層）は各年次の調査結果から追う限り、この旧河道より東側の、北西から南東に向かって傾斜する微高地とその縁辺部にあることが推測される。

また、その大きく捉えた微高地内に小谷が存在する可能性が高いことも前章で述べた通りである。即ち、エレベーター部分の溝1や『自由通路の調査』において検出されたS X04^⑬とI区の1・2号墳の間、また1・2号墳と3・4号墳の間には遺構面の出現レベルの違いから考えて小谷が存在する可能性が高く、また、今回の調査の結果では、3・4号墳と坊ヶ塚遺跡の古墳群の間には、河道が走る微高地の縁辺部と微高地の上部といった立地の違いが見受けられるのである。

さて、今回検出した4基の古墳は周溝の切り合い・主軸方位から2群に分けることが出来る。

一つは主軸の方位をN11°W前後にとるもの（A群）で、1・3・4号墳・溝1がそれにあたる。A群の古墳は神戸市教育委員会の11次調査でも調査されている。また、溝1の北側のSX04は方位をN12°W前後にとるもので、やはりA群の古墳である可能性が強い。A群の内、3・4号墳の時期は、今回の調査および11次調査の結果から古墳時代中期末前後と考えられる。ほぼ同一の層位・方位の他の古墳もまた、同様の時期と考えられる。

今一つは主軸の方位をN18°W前後にとるもの（B群）で2号墳がそれにあたる。方位を坊ヶ塚遺跡で調査された古墳と同じくする。^{註1} 坊ヶ塚遺跡の古墳は6世紀前半と考えられている。B群がA群に後出する点は本調査での結果も矛盾はない。若干距離を置くが、2号墳もまた同様の時期が想定出来る。

両群の性格を考えるならば、A群の古墳は、微高地の縁辺部に分布し、住吉東古墳等を含む6世紀初頭を前後する一群、これに対してB群の古墳は微高地の上部に立地し、坊ヶ塚古墳群を主とした、A群よりも新しい一群と捉えることができる。今回の調査地点は、微高地の傾斜変換点にあたり、このA・B両群の分布が重複する地点であったと考えることができる。また、時期差を勘案すれば、微高地の縁辺部から微高地上への古墳の占地の変化が考えられ、墓域の移動・重複が調査区内で見られたと捉えることもできる。

これらのA・B群の古墳は、現在までの調査結果に掲げる限りは、微細な地形によって小支群に分かれる可能性はあるものの、同時期の古墳間では広範囲（特にA群の古墳については、微高地の縁辺に沿って広く分布している。）に極めて規則正しい方位性を持っていた可能性が考えられる。これに対して、本住吉神社東側の旧河道より西側では同じく微高地の縁辺部にあたる部分で神戸市教育委員会の第1・2次調査^{註2}によって計11基の古墳が検出されているが、それらの方位はN20°W前後にとるもので、A群に属する古墳とは方位を異にしている。B群の古墳とは比較的方位に類似性を見出せるが、出土遺物からみる限り、A群との時期差を考慮することは難しい。南流する旧河道を挟む2つの微高地上では同時期でありながら主軸方位が違う古墳が構築されていた可能性が高く、支群もしくは古墳群自体が違うものと捉えられよう。

以上、住吉宮町遺跡の古墳分布について若干の推測を述べたが、広い一つの微高地上やその縁辺に展開する古墳が小支群に分かれつつも同じ規則性のもとに占地していると判断するには現在の資料状況には限りがある。また、橿原P-5Nにおいて報告されているSX03^{註3}の如くほぼ真北に走る周溝が存在することは考慮にいれるべきで有ろう。

註1 渡辺 畏『住吉宮町遺跡群I（坊ヶ塚遺跡）』兵庫県教育委員会 1989年

註2 渡辺 畏『住吉宮町遺跡群II』 兵庫県教育委員会 1990年

註3 註1に同じ。

註4 註2に同じ。

註5 『昭和60年度神戸市埋蔵文化財調査年報』 神戸市教育委員会 1987年

註6 註1に同じ。

土器観察表

昭和63年度エレベーター部分・推進工到達立坑出土遺物

No.	器種	出土地区 出土層位	法量(cm)	形態・技法の特徴	色調	備考
1	土師器 ミニチュ ア壺	エレベーター 溝1	口径 4.9 器高 7.0 腹径 8.1 底径 3.1	底部は突出。偏球状の体部に短く立ち上がる口縁部。端部は肥厚し丸い。底部外側指押さえ、体部外面はナデ、内面は体部中位から口縁部と底部から体部中位への上下2度の指ナデ。口縁部内外面はヨコナデ。	浅黄橙 10YR8/4	
2	土師器 台付鉢	エレベーター 溝1	口径 10.4	体部から口縁部にかけて内彎しつつ上外方にのびる。端部は丸い。口縁部外側はヨコナデ、体部外面は綫方向のナデ。内面の調整は不明。	外 黄褐 10YR5/6 内 棕 7.5YR6/8	
3	土師器 壺	推進工 6.7層	口径 17.0	肩部の落ちた長胴形の体部。頸部でくの字に屈曲、口縁部は外反気味に上外方へ。端部は外側の面に粗刻み目を施す。体部外面は右上がりの平行叩き後藤ハケ、内面は丁寧なナデ。口縁部外面は上から下へナデ、内面は斜め方向の板ナデ。	明黄褐 10YR6/6	
4	土師器 壺	推進工	口径(17.0)	肩部の落ちた長胴形の体部。頸部でくの字に屈曲、口縁部は外反気味に上外方へ。端部は丸い。体部外面は右上がりの平行叩き。内面は丁寧なナデ。口縁部内外面はナデ。内面頸部に指押え痕。	純い棕 5YR6/4	
5	土師器 壺	推進工	底径 4.3	突出した底部、丸みを帯びた体部。内外面とともに指ナデによる調整を施す。	外 純い黄棕 10YR7/4 内 棕 5YR6/6	

平成元年度調査出土遺物

遺構・旧河道出土の遺物

No	器種	出土地区 出土層位	法量(cm)	形態・技法の特徴	色調	備考
6	土師器 壺	II区 3号墳周溝	口径(13.4)	丸みを帯びた体部。口縁部は直立し、端部付近で心持ち外反。端部は丸い。体部内外面はナデ。口縁部外面はヨコナデを施す。	橙 5YR6/6	
7	須恵器 肩部	II区 土壤3	底径 9.4 脚高 2.0	舞部3カ所に穿孔。内外面ともにロクロナデ。	灰 7.5Y6/1	
8	土師器 高杯	III区 旧河道 灰黒粘砂	口径(15.0)	丸みを帯び上方へ立ち上がる。口縁端部は上端に面。体部内外面はナデ。口縁部外面はヨコナデ。	明褐 7.5YR5/6	
9	土師器 高杯	III区 旧河道 灰黒粘砂	口径(13.8)	杯部は丸みを帯び上方へ立ち上がる。口縁部は上端に面を持ち、内側へ弧張。体部内面へラミガキ。外面及び口縁部内面はヨコナデ。杯部と脚部の接合部指オサ工痕。	明赤褐 2.5YR5/6	
10	土師器 高杯	III区 旧河道 灰黒粘砂	口径 13.8 器高 10.6 底径 10.6	杯部は丸みを帯び上方へ立ち上がる。口縁部は丸い。基部は細く、脚部は下外方に下がった後唇部1/3下位より外下方に開く。端部は面を持つ。杯部は外表面ともヨコナデを施す。杯部外面と脚部との接合部に指オサエ模。脚柱部内面は2段のケズリ、脚部外面はヨコナデ、内面は板ナデを施す。	橙 2.5YR6/6	
11	土師器 壺	III区 旧河道 灰黒粘砂	口径 9.8 腹径(13.3)	やや偏平な体部に上外方へ立ち上がる口縁部をもつ。端部は丸い。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部は内外面ともナデ	明赤褐 2.5YR5/6	
12	土師器 壺	II区 旧河道 灰黒粘砂	口径(13.8)	丸みを帯びる体部。頸部でくの字に屈曲、口縁部はやや内湾気味に上外方へ立ち上がる。端部は肥厚し丸く取める。体部外面は横ハケ、内面はヨコナデ。口縁部外面はヨコナデ、内圈は横ハケのうちヨコナデを施す。内面頸部に指押え痕跡。	灰褐 7.5YR6/2	
13	須恵器 杯壺	III区 旧河道 灰黒粘砂	口径(12.2) 器高 4.5	天井部は平坦。天井部と口縁部を分ける棱は短く水平に突き出る。口縁端部は若干摘み出され凹部を持つ。天井部の約1/2にロクロ削りを施す。	外 青灰 5BG5/1 内 褐灰 5YR5/1	
14	須恵器 杯壺	III区 旧河道 灰黒粘砂	口径(12.4) 器高 4.8	天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部を分ける棱は短く下外方に向けて突き出る。口縁端部は若干摘み出され凹部を持つ。天井部の約1/2にロクロ削りを施す。	青灰 10BG6/1	
15	須恵器 壺	III区 旧河道 灰黒粘砂	口径 24.4	上外方へ立ち上がり中位より緩やかに外反する口縁部。端部は摘み上下に拡張する。口縁部中位に波状文、その上下に計3本の突帶を巡らす。	暗青灰 5B4/1	

No.	器種	出土地区 出土層位	法量(cm)	形態・技法の特徴	色調	備考
16	須恵器 壺	Ⅲ区 旧河道 灰黒粘砂	口径(21.8) 器高 32.6 底径 36.4	やや尖り気味の丸底の底部、肩の張った体部に、上外方へ立ち上がり上位で外反する口縁部をもつ。端部は摘み上方に拡張する。口縁部下端に突帯を巡らす。肩部以下は外側に右上がりの平行叩きを施した後、肩部を中心部分にカキメを施している。内面は同心円叩きのうち不十分な擦り消しを行っている。	灰 5Y6/1	

包含層出土の遺物

No.	器種	出土地区 出土層位	法量(cm)	形態・技法の特徴	色調	備考
17	弥生土器 壺底部	I区 包含層	底径 4.5	若干突出した底部から外上方へのびる体部。底部輪台技法。体部外面は右上がりの叩き。	鈍い赤褐 5YR5/4	
18	弥生土器 壺底部	I区 包含層	底径 4.4	若干突出した底部から外上方へのびる体部。底部外面付近に指押さえ。体部外面は右上がりの叩き。	浅黄橙 7.5YR8/6	
19	弥生土器 壺底部	II区 土壇3 流れ込み	底径 (4.8)	若干突出した底部から外上方へのびる体部。底部内面放射状にナデ。体部外面は右上がりの叩き (2 条/cm)。	暗灰黄 2.5Y5/2	
20	弥生土器 壺底部	II区 包含層	底径 (4.5)	若干突出した底部から外上方へのびる体部。底部外面付近に指押さえ。	明赤褐 2.5YR5/8	
21	土師器 杯	II区 黄白細砂～ 細砂	口径(10.4) 器高 (3.3) 底径 (3.4)	底部から丸みを帯びて立ち上がる。口縁部は単部付近に至って外反する。 内面に放射状の暗文。外側はナデか。	明赤褐 2.5YR5/8	
22	土師器 杯	II区 古墳時代後期 包含層	口径(12.6) 器高 (4.5) 底径 (7.8)	厚い造り。平底。体部は上外方に立ち上がり、口縁部は内側しつつ上方へ立ち上がる。端部は丸く收める。底部内面・底部外側・体部外面は縱方向のユビナデ。口縁部外面はヨコナデ。	外 橙 5YR7/8 内 鈍い黄橙 10YR7/4	
23	土師器 高杯	II区 灰黑色 土・古墳時代 後期包含層	口径(13.8) 器高 (10.6) 底径 (9.6)	10と同様の器形。杯部は丸みを帯び上方へ。口縁部は丸い。基部は細く、肩部は下外方に下がった後壠部1/5下位より外下方に聞く。端部は丸い。杯部は内外面ともにヨコナデ。杯部外側と脚部との接合部に指押サエ痕。脚柱部内面ケズリ、壠部内面外面はヨコナデを施す。	橙 7.5YR7/6	
24	土師器 小壺	II区 古墳時代後期 包含層	口径 (6.8) 器高 5.1 底径 7.8 底径 3.2	平底。彌球形の体部。口縁部は短く立ち上がり、外反する。内面の底盤から体部下半にかけてはナデ。体部上半から外側口縁部にかけてはヨコナデ調整。	淡橙 5YR8/3	遺物集中点 出土
25	土師器 壺	II区 古墳時代後期 包含層	腹径 15.3 底径 1.6	球状の器形。口縁部を欠く。外側底部下半と内面の底部から体部下半にかけてはナデ。体部上半は内外面ともヨコナデ。	鈍い橙 5YR7/4	遺物集中点 出土

No.	器種	出土地区 出土層位	法量(cm)	形態・技法の特徴	色調	備考
26	土師器 甕	II区 表 採	口径(17.8)	くの字に屈曲し、外上方へ真っ直ぐにのびる口縁部。端部は丸く收める。内外面ともにヨコナデ。	鈍い黄橙 10YR7/3	
27	土師器 甕	III区 黄灰色板細砂	口径(19.2)	丸みのある肩部からくの字に屈曲し、外上方へ真っ直ぐのびる口縁部。端部は丸い。口縁部は内外面ともにヨコナデ。	鈍い橙 5YR7/4	
28	土師器 甕	II・III区 灰色粘砂	口径(19.0)	肩部は張らず丸みを帯びる体部。頭部でくの字に屈曲。口縁部は内高気味に上外方へ。端部は肥厚し、上部に面をもつ。体部外面は横ハケ、内面は頭部附近はヨコハケ。それ以下はヨコナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向の板ナデ。	明赤褐 2.5YR5/6	
29	円筒形 土製品	I区(P-3)	口径(18.8) 器高 10.4 底径 12.0	上外方へやや開き気味の円筒形。両端は丸く收める。外圍に粗いタテハケ。疊付部分に研造りおよび粘土ひも巻き足し、底部内外面に粘土の継ぎ足しを行う。	浅黄橙 7.5YR8/4	
30	土師質 円筒埴輪	II区 古墳時代後期 包含層	口径(18.8) 器高(10.4) 底径(11.0)	外面はタテハケを施し、瘤添付部分は横ナデを施す。内面はタテハケを施す。	橙 7.5YR6/6	
31	須恵器 高杯	II区 古墳時代後期 包含層	口径 11.1	口縁部は内傾して立ち上がる。端部は肥厚し上部に面をもつ。受部は水平にのびる。全体的にやや偏平。脚部は3方に透きをもつ。杯部底部1/2をロクロ削り。	緑灰 10G6/1	遺物集中点 出土
32	須恵器 底 口縁部	II区 灰黑色 土—古墳時代 後期包含層	口径(12.2)	口縁部は外側へ肥厚し、上部に面を持ち、中位に突帶を巡らす。内外面ともにロクロナデ。突帶の上下に4本と8本の櫛描き波状文を施す。	灰白 7.5Y7/1	
33	須恵器 盤	III区	口径(24.0) 器高 2.0 底径(20.0)	平底の底部から外上方へ真っ直ぐに立ち上がり口縁部に至る。端部は丸くおさめ内側に沈線を造らせる。底部外面は窪きり、体部・口縁部および底部内面はロクロナデ。	灰白 7.5Y8/1	
34	昇牠陶器 碗	I区 灰色シルト混 じり極細砂	底径(8.0)	丸みを帯びた体部。底部外面は回転糸きりののち、低い高台を貼りつける。底部内面に目痕。高台裏の中央部を除き全面に施釉する。	暗オリーブ 7.5Y4/3	
35	土師器 小皿	I区 淡茶灰色砂	口径(8.8) 器高 1.5 底径(5.0)	やや丸みを帯びた平底から内壁しつつ立ち上がり口縁部にいたる。端部は丸い。底部内外面は指押え、体部・口縁部は横方向のナデを施す。	鈍い黄橙 10YR7/4	
36	土師器 小皿	I区 灰褐色土	口径(7.4) 器高 1.6 底径(3.0)	底部から丸みをおびて立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸く收める。内外面とともに横方向のナデによる調整。	淡黄 2.5Y8/4	

No.	器種	出土地区 出土層位	法量(cm)	形態・技法の特徴	色調	備考
37	土師器 小皿	I 区 石列面上 中粗砂	口径 9.3 器高 1.3 底径 7.8	やや丸みを帯びた平底。底部体部境で軽く屈曲し外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。端部は肥厚し丸い。底部内外面は指押え、体部・口縁部は横方向のナデ。	淡黄橙 10YR8/3	
38	土師器 皿	I 区 灰褐色土	口径(13.6) 器高 2.3 底径(10.8)	やや丸みを帯びた平底。口縁部体部境で軽く屈曲し外上方へ立ち上がる。端部は肥厚し丸い。底部内外面は指押さえ、体部・口縁部は横方向のナデを施す。	純い黄橙 10YR7/4	
39	土師器 壺	I 区 南 石列間の灰褐色土	口径(25.0)	ぐの字に眉をなす頸部、口縁部は内彷氣味に外上方へのびる。口縁端部は若干肥厚し角頭を呈する。口縁部内面は横方向のハケ、口縁部外面はナデ調整。	褐 7.5YR4/3	
40	土師器 脚	I 区 南 石列間の灰褐色土	脚長 14.7 径 2.1	壺もしくは羽垂の三足脚。外面ナデ調整。	灰黄褐 10YR4/2	
41	瓦器 小皿	I 区 淡茶灰色砂	口径 10.0 器高 1.7 底径 5.2	底部から体部は丸みをおびて立ち上がる。口縁部は外反し端部は丸く收める。底部・体部外面は指押さえ、口縁部は横方向のナデ、底部・体部内面は横方向の暗文を施す。	灰 5Y5/1	
42	瓦器 碗	I 区 灰褐色土	口径(13.9)	体部は丸みをおびて立ち上がり口縁部はやや外反し、端部は丸く收める。体部外面は指押さえ、口縁部は横方向のナデ、内面は体部下半に螺旋状暗文、体部上半から口縁部にかけては横方向の暗文を施す。	灰 5Y4/1	
43	瓦器 碗	I 区 粗砂	口径(13.4) 器高 4.0 底径(3.6)	粘土紐による蓮鉢状の高台をはりつける。底部から体部は丸みをおびて立ち上がり口縁部はやや外反し端部は丸く收める。底部・体部外面は指押さえ、口縁部は横方向のナデ、内面は底部から体部下半に螺旋状暗文、体部上半から口縁部にかけては横方向の暗文を施す。	灰 N4	
44	白磁 碗底部	I 区 石列面上 培灰褐色土	底径(7.3)	短く削り出した輪高台。内面および外面体部下半まで施釉。底部外面および体部下半の一部は露胎。	灰白 5Y8/1	
45	施釉陶器 碗	II・III区間 土手内 旧畳土	底径(5.0)	丸みを帯びた体部に輪高台。高台際・高台・高台裏を除き施釉。見込みに絵付け。	浅黄 5Y7/4	

図 版

図版1 住吉宮町遺跡周辺空中写真

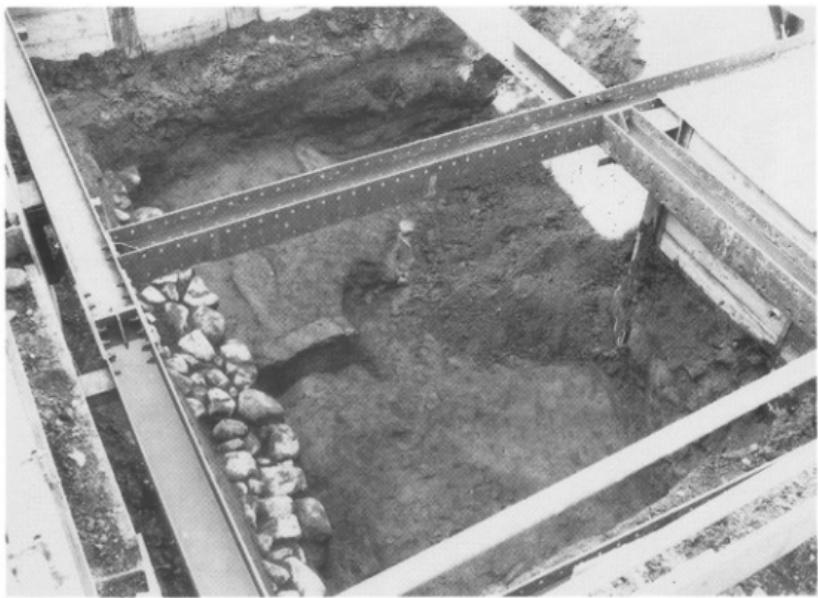




1. 住吉宮町遺跡遠景(北から)



2. 住吉宮町遺跡遠景(南から)



1. 主調査区全景（南東から）



2. 石垣状遺構1・溝1検出状況



1. 主調査区土層堆積状況（西壁）



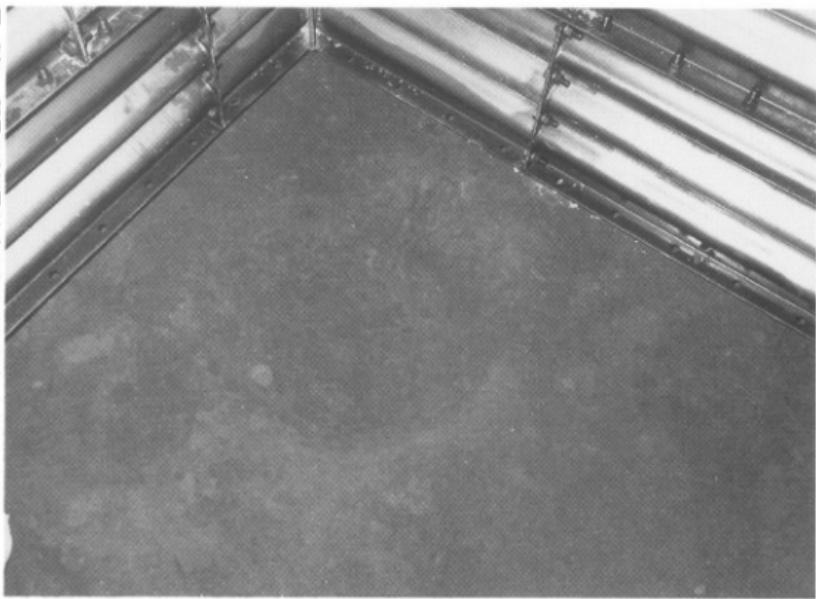
2. トレンチ 3 土層堆積状況（北西から）



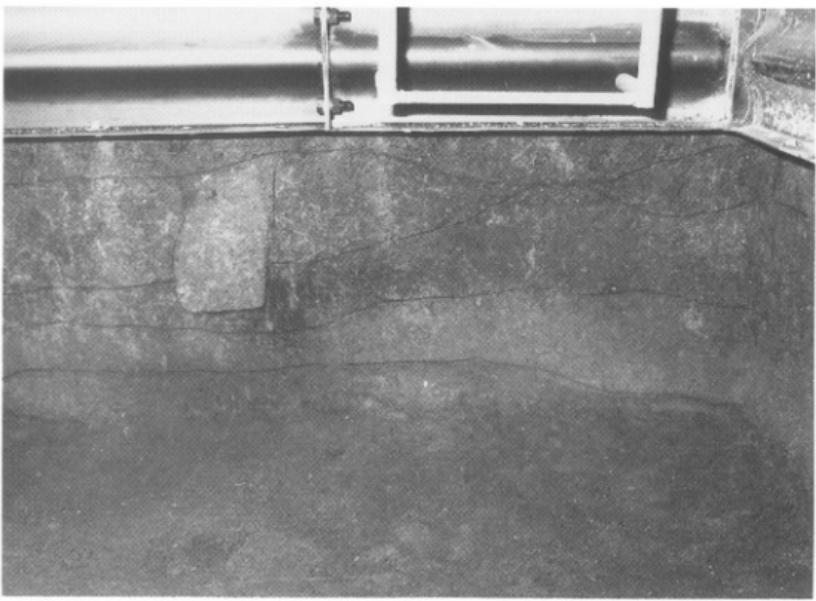
1. P-3 旧地形検出状況



2. P-3 調査状況



1. 推進工到達立坑土壤検出状況



2. 推進工到達立坑ピット確認状況



1. 1・2号墳検出状況（西から）



2. 1号墳全景（南から）



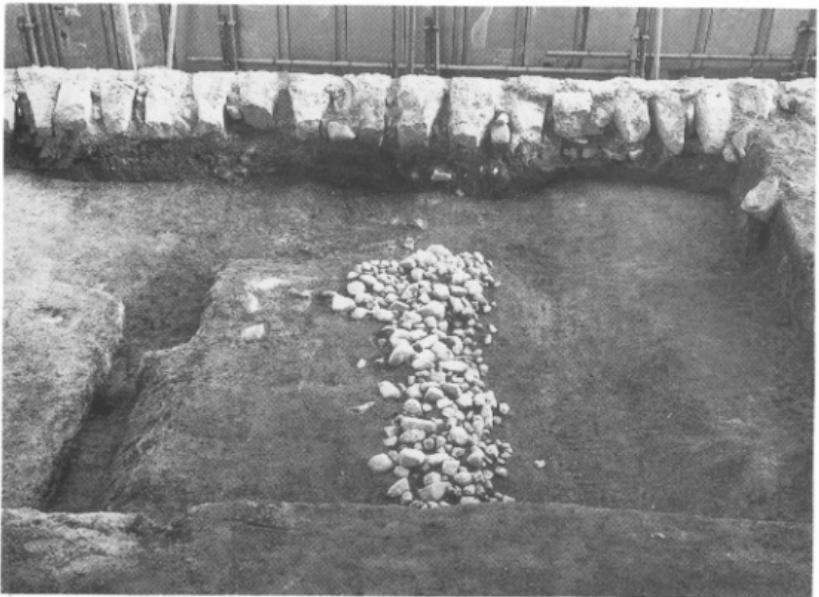
1. 2号墳西半部（南西から）



2. 2号墳東半部（東から）



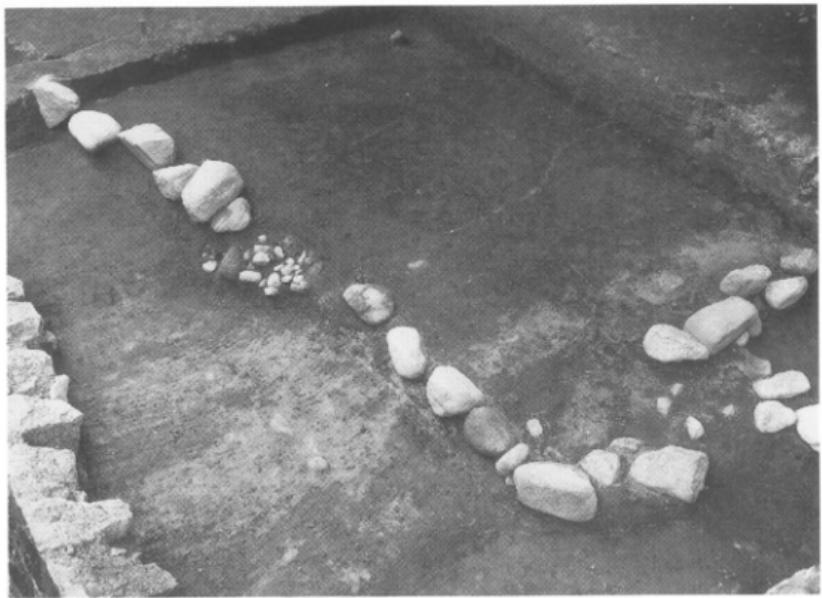
1. 溝5全景（西から）



2. 溝5全景（北から）



1. 石垣状遺構 2・溝 7 検出状況（北から）



2. 石垣状遺構 2・溝 7 検出状況（南東から）



1. 土層堆積状況（西壁）



2. 1・2号墳周溝部分（北壁断面）



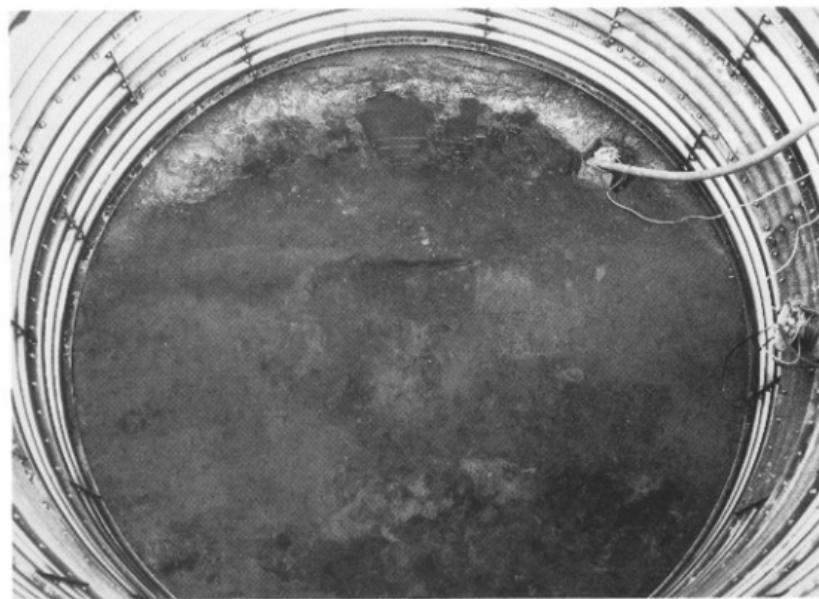
1. 3号墳全景（西から）



2. 3号墳・土壌3全景（東から）



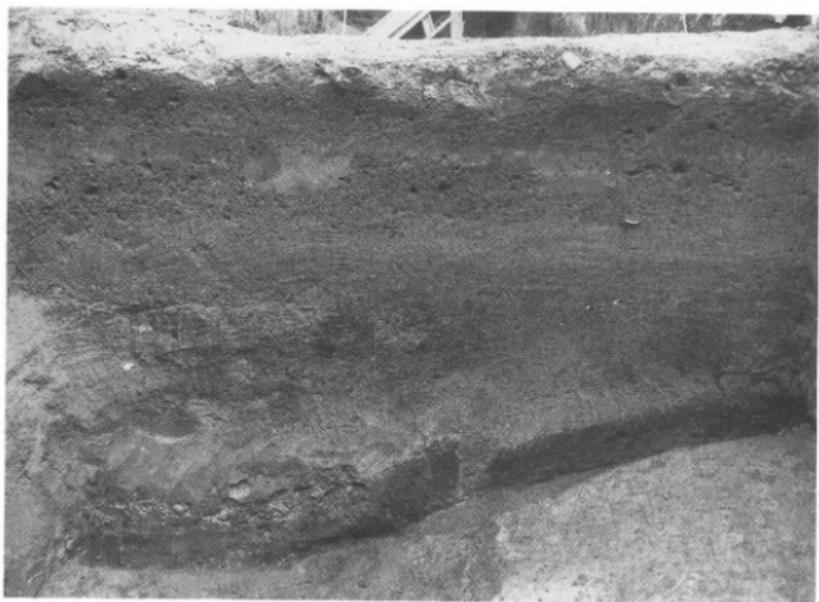
1. 3号墳全景(東から)



2. 3号墳(P-2部分)



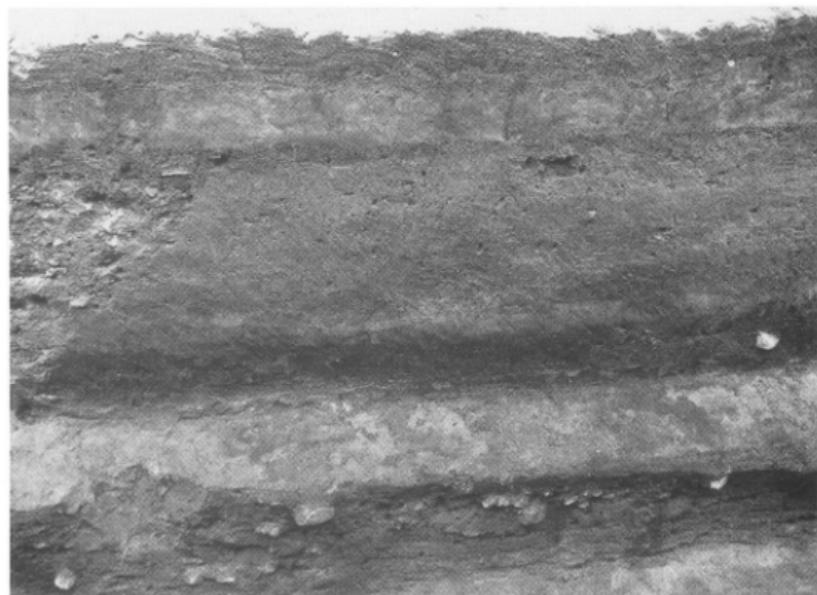
1. 4号填周溝（南壁断面）



2. 古墳時代後期河道土層堆積状況（II・III区間断面）



1. IV区全景



2. 土層堆積状況（III区北壁）



1



2



3



5

1. 溝 1(1・2) 推進工到達立坑包含層(3・5)



10

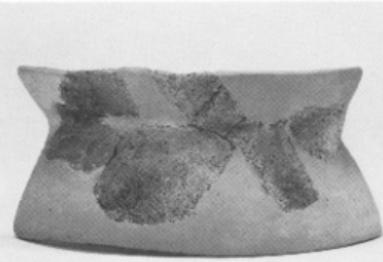
2. 古墳時代中期末頃の河道(8・9・10)



8



9



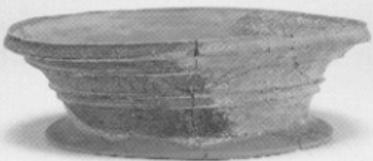
12



11



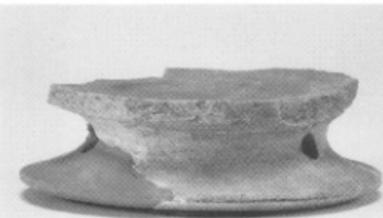
13



15



14

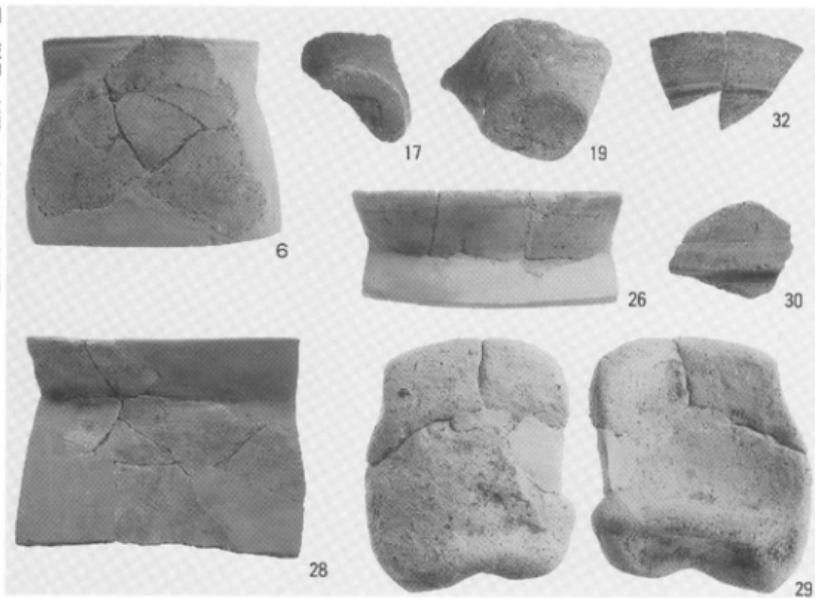


7

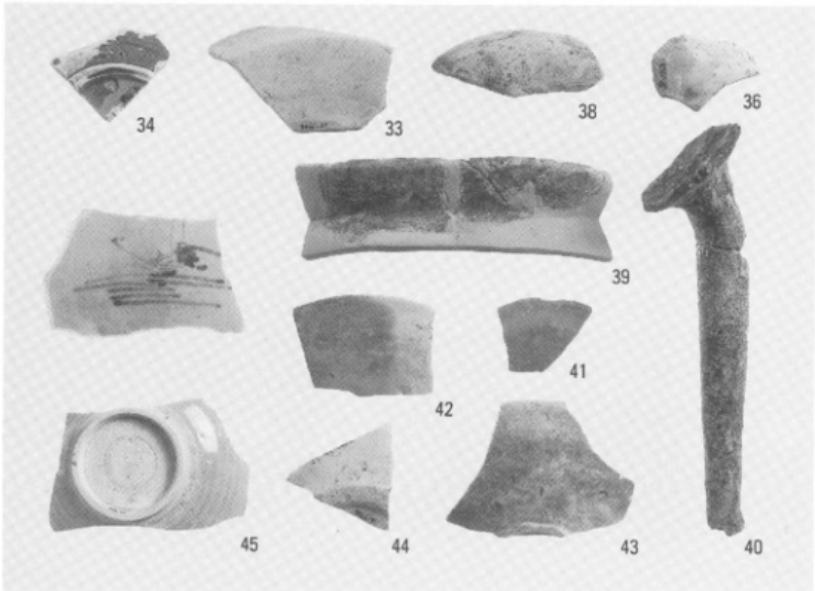


16

土壤 3 (7)・古墳時代中期末頃の河道(11~16)



1. 3号墳周溝(6)・弥生時代後期(17・19)・古墳時代中期末頃(26・28~30・32)



2. 奈良時代～江戸時代



21



22



24



23



25



27



31



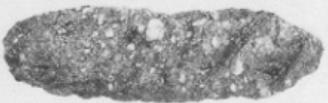
37



35

古墳時代中期末頃(21~24・25・27・31)

鎌倉時代(35・37)



46

47

1. 鎌(46)・鉄鎌(47)



48

2. 不明鉄製品(48)

兵庫県文化財調査報告書第83冊

1991年1月31日 発行

住吉宮町遺跡発掘調査報告書

—住吉駅南側一部新設工事及び住吉駅ビル建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

編集 兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078)531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL (078)341-7711

印刷 船場印刷株式会社
〒670 姫路市定元町4の2
TEL (0792)96-3535